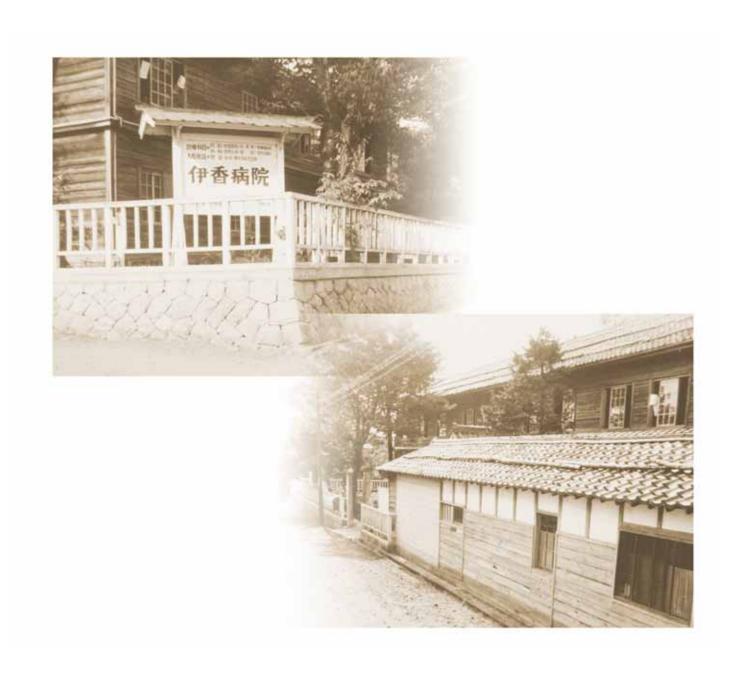
創立 100周年をむかえて



記念式典



市長式辞

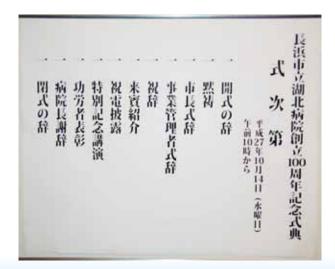






事業管理者式辞





記念式典



京都府立医大 吉川敏一学長 特別記念講演



功労者表彰





病院長謝辞



功労者表彰



記念式典



功労者と関係者の皆さん

高橋寿美子 木下友子 上野隆史※ 安倍義明 山下滋夫 弘中武 藤井富夫 林喜彦 高橋義達 笹井けい子 小嵜満智子 多賀俊明 伊達成基 野田秀樹 大音忠行 轟清子 中村藤枝 東野八重子 (※七郷小学校の校長:団体表彰代表)



パネル展示(100年の歩み)

記念祝賀会













長浜市立湖北病院創立100周年記念誌

目次

創立100周年記念誌の発刊にあたって 長浜市長 藤井 勇	勇治 8
刻まれた100年の歴史を振り返って長浜市病院事業管理者 野田 孝	秀樹 9
創立100周年を迎えて長浜市立湖北病院長 伊達 成	基 10
理念•基本方針	11
歷代院長	12
歩み	
1915(大正 4)年~	14
1943(昭和18)年~	
1969(昭和44)年~	
1978(昭和53)年~	
1995(平成 7)年~	
2009(平成21)年~	
年 表	26
寄稿文	
四个	
特別寄稿 伊香病院の創設、そして解散と買戻し・再開について富田 光	彦 38
特別寄稿 冨田八郎槍堂翁と私北嶋 精	智 40
特別寄稿 私の病診連携雨森 正	高 42
特別寄稿 馬場道夫院長を偲んで山下 滋	夫 44
先陣の志を受け継いで北村 又	郎 45
創立100周年記念によせて安倍 義	明 46
"徒然なる"ままに西垣 逸	郎 47
百周年想いを今に秋の空小嵜満智	子 48
創立100周年記念によせて笹井けい	子 49

私の回想	義達	50
検査室の想い出横田	幸三	52
百年の謎 - 湖北鉄道史森川洋	享一郎	54
湖北での25年間田中	新司	55
百周年の日に思う	弘一	56
回想 ~ 電算システムの導入 ~	浩一	57
看護局松田雪	多恵子	58
放射線技術科文室	吉辰	60
中央検査技術科小谷	誠孝	61
薬剤科北川	裕之	62
リハビリテーション技術科熊河	久登	63
機器センター山内-	一登与	64
栄養科中川	歩美	65
湖北やすらぎの里川崎	尚子	66
資料		
病床数の変遷		68
組織図		69
統計資料		70
職員写真		74
編集後記		82
表紙写真	森川淳-	一郎



創立100周年記念誌の発刊にあたって

^{長浜市長} 藤井勇治

長浜市立湖北病院は、第一次世界大戦の最中であった大正 4 年、「旧伊香郡全ての人々に医療を」という 崇高な理念のもと、故冨田八郎氏をはじめとする有志で結成された「伊香郡愛郷会」によって、「伊香病院」 として創設されました。その後、日本医療団による買収や買い戻しをはじめ、昭和 47 年の医師団総辞職に よる病院閉鎖など幾多の困難を乗り越え、平成 27 年に創立 100 周年を迎えることができました。

この間、昭和37年には大規模な本館改築・増床を行い、同58年には「伊香郡病院組合立湖北総合病院」と名称を変更して現在の地に移転・新築するなど、時代の変遷と地域住民のニーズに合わせて病院機能の拡充を図ってまいりました。また、平成元年には滋賀県初となる病院併設型の介護老人保健施設を開設し、同7年には、今後の地域の介護需要を見越して特別養護老人ホーム、デイサービスセンター等を有した広域総合保健医療福祉センターを開設するなど、国民健康保険直営診療施設として、医療だけでなく福祉・介護が一体となった総合的なサービスを提供する「地域包括医療・ケア」を実践してまいりました。

現在、湖北病院は18の診療科を標榜し、一般病床96床(急性期48床、地域包括ケア48床)、療養病床(医療型)57床の計153床を有する「長浜市北部地域の基幹病院」として、一般急性期から慢性期に至るまでの幅広い診療を行うとともに、併設の訪問看護ステーションによる在宅サービスを提供するなど、医療・介護に切れ目のないサービスを提供しています。また、滋賀県が指定する「へき地医療拠点病院」として、山間地域の3診療所への出張診療を継続するなど、地域に根ざした医療の提供にも努めています。

このように、現在の湖北病院を築くことができましたのも、関係各位をはじめ、地域の皆様の変わらぬご 支援の賜物と感謝申しあげるとともに、幾多の困難を克服してこられた諸先輩のご苦労に敬意を表するとこ ろであります。

さて、現在、自治体病院を取り巻く環境は、医師不足や経営上の課題など全国的に厳しい状況にあり、特に市北部地域においては、過疎化や高齢化が著しく進み、大きな課題となっております。

また、国・県においては、「地域医療構想」の策定が急がれ、自治体病院におきましては、これに基づく 新たな「公立病院改革プラン」の策定など、10年後の病院像を示す取り組みが必要となっております。

こうした状況を踏まえ、湖北病院は、これからも市北部の基幹病院として地域に根ざし、国が進める「地域包括ケアシステム」の実現に向けて取り組む所存でございますので、今後とも関係各位ならびに地域の皆様のご支援、ご協力をよろしくお願い申しあげます。

結びとなりましたが、本誌の発刊にあたりご協力いただきました皆様に深く感謝申しあげますとともに、 ご高覧いただければ幸いに存じます。



刻まれた100年の歴史を振り返って

長浜市病院事業管理者 野田秀樹

当院は、大正4年7月に設立され、その後時代の要請を受け多くの経営形態を経て、平成22年の市町村合併で長浜市立湖北病院として新しいスタートを切りました。そして、本年めでたく100周年を迎えることになりました。その歴史は時々の政策医療、地域住民の思いを反映しながら、先見の明と的確な判断をもってつねに先進的に地域医療・福祉を実践してきた先輩諸氏の足跡そのものです。今まで幾度となく襲われた危機的状況を乗り越えての歴史です。また、この歴史は、地域住民の皆様のご理解と温かいご支援の賜物でもあります。改めて敬意とお礼の気持ちを表したいと思います。

少子高齢化が急激に進み、「2025年問題」など多くの問題を抱え、医療・福祉のあり方が大きく変わろうとしていますが、当院は、都市部のどこよりも早く進むであろう少子高齢化、地域の過疎化を先見し、先手を打って制度・組織が創られてきました。滋賀県初の病院併設型老人保健施設「湖北やすらぎの里」を運営し、へき地医療拠点病院として中河内、杉野、金居原にへき地診療所を有し、訪問看護ステーション等と協働のもと、域内の巡回・訪問診療・看護も行ってきました。また、敷地内に広域総合保健医療福祉センター(特別養護老人ホーム「伊香の里」、デイサービスセンター、軽費老人ホームなど)があり、シームレスな医療・福祉の連携を目指して、病院の理念である「地域住民のための病院づくりを推進し、地域包括医療・ケアを実践します。」の達成にむけ、全力を挙げて頑張って来ました。

新医師臨床研修制度や看護体制等、大きな制度変化のうねりを受け、常勤医師の半減、看護師不足など人 材確保・育成面で非常に厳しい局面を迎えましたが、関係大学・機関のご支援を得て、少しずつ先が見えて こようとしています。これからの医療・福祉領域の環境変化、それに伴う制度変化を読み、それに対応でき る柔軟で強い組織力を養うべく人材確保・育成を最優先課題に取り組むとともに、ハード面については、近 い将来の病院再建、改築に向けた将来構想委員会を立ち上げ検討をはじめたところです。

今、「地域医療構想(ビジョン)」がうちだされ、都道府県、医療圏単位の医療・福祉制度が国を挙げて進められようとしていますが、私たちはこの100周年という歴史の節目を新たな出発点とし、歴史と伝統をしっかり受け継ぎ、職員一丸となって先人の思いをさらに発展させ、地域の医療・福祉を守っていかねばならないと考えています。

平成27年10月14日、地元住民の皆様の暖かい見守りと関係機関のご支援を得て、無事「100周年記念式典」を終えることができました。ご厚情に感謝いたしております。



創立100周年を迎えて

長浜市立湖北病院長 伊達 成基

当院は、大正4年7月14日この世に生を受け、平成27年7月15日、百寿(100歳)を迎えることができました。これもひとえに、今日まで温かく見守っていただいた旧伊香郡の住民の皆様、医療関係者の皆様、また、関係各位の皆様のご尽力とご協力の賜物と、ここに深く感謝申し上げます。

大正4年といえば、世界では第1次世界大戦の最中であり、日本では政治、社会、文化などにおける民主主義、自由主義的な運動や考え方から「大正デモクラシー」とよばれる時代でした。医療界においては、地域や貧富による医療の格差をなくしていく「医療の社会化」の考え方が主張され始めた時でした。この当時においても、医師および病院は都市に集中し、農村その他において不足がみられており、医療の偏在が問題になっていたようです。そこで、貧しい人々にも医療をという事で「相互扶助」「共労共営」の考えで市町村を中心に実費診療所が開設され始めた時期のようです。

このような時代に当院は、旧伊香地域の人々にも医療をという「救民救済」の考えで、地元の名士である 冨田八郎氏(木之本町長のち昭和3年衆議員議員)が中心となって「伊香郡愛郷会」をつくり、会長として 「伊香病院」を開設されました。

この後、病院機能の付加や病床数の増加を繰り返しながら、昭和58年には「伊香郡病院組合立湖北総合病院」と名称変更し、現在の地に新築移転を行いました。その後、平成22年には市町村合併により「長浜市立湖北病院」と名称変更し、現在に至っております。

この間、当院は昭和47年4月1日から同年8月16日まで医師団総辞職による病院閉鎖という、地域住民の皆様にとっては医療を受けられない不幸な時期がありました。この危機も京都府立医科大学の支援により乗り越え、100年間という年月、地域に根ざし、へき地医療拠点病院として無医地区診療所への医師派遣を継続し、平成元年には滋賀県下では初めて病院併設型の介護老人保健施設を、平成7年には特別養護老人ホームや軽費老人ホームなどを備えた伊香郡広域総合保健医療福祉センターを開所し、文字どおり地域住民の皆様と共に地域医療を実践してまいりました。

現在、日本は世界に例を見ない高齢化社会に突入しようとしております。当院は療養病床、介護老人保健施設、特別養護老人ホームを同じ敷地内に有する強みを活かし、住民の皆様が年老いても、住み慣れた地域で安心して生きがいの見出せる生活ができるよう、保健医療から在宅まで、これまでも、これからも地域住民の皆様と一体となって歩んでいきたいと願っております。

これからも地域住民の皆様、医療関係者の皆様、関係各位の皆様のご指導ご鞭撻のほど何卒宜しくお願い申し上げます。

理念

地域住民のための病院づくりを推進し、 地域包括ケアを実践します。

安全・・・・安心できる確かな医療を提供します

納得・・・・心をこめた納得の医療を提供します

連携・・・・連携で創る安らぎ空間を提供します

基本方針

- 患者の権利、尊厳を重視した医療を実践します。
- 良質な医療水準を確保し、安全で快適な療養環境の提供に努めます。
- 医学研究水準を確保し、安全で快適な療養環境の提供に努めます。
- 職員が互いに尊重・協力し、元気で働きがいのある職場づくりに努めます。
- へき地医療拠点病院として、当圏域内の山間、へき地への巡回診療等を実施し、地域の適正な医療を確保します。
- 国保直営診療施設として地域包括医療・ケアに積極的に取り組みます。
- 地域包括医療・ケア認定施設として、地域の高齢化に対応します。
- 併設の介護老人保健施設との連携を強化し、介護サービス提供可能な複合施設としての機能を発揮します。



歴代院長

初代院長

横井薫

大正4年7月~ 大正10年5月

3代院長

馬場陽一

大正14年12月 ~ 大正15年11月

5代院長

藤田恒男

昭和9年10月~ 昭和15年8月 2代院長

吉村良行

大正10年6月 ~ 大正14年12月

4代院長

篠山誠之

大正15年12月 ~ 昭和9年10月



6代院長 北嶋精智 昭和15年10月~ 昭和37年3月



7代院長 大樋善信 昭和37年4月~ 昭和39年3月



8代院長 北小路博央 昭和39年4月~ 昭和43年6月



9代院長 東 平介 昭和43年7月~ 昭和47年3月



10代院長 馬場道夫 昭和47年8月~ 平成6年3月



11代院長 山下滋夫 平成 6年4月~ 平成15年3月



12代院長 森川淳一郎 平成15年4月~ 平成21年3月



13代院長 伊達成基 平成21年4月~ 現在

1915(大正4)年~

伊香病院設立



創設当初の伊香病院

敷地面積 用地面積:986坪

建物面積:481坪

病 室 25床

医師数3名、薬剤師数1名

看護婦数 8名

他に 車夫、小使、炊婦

病院平面図

伊香病院は、大正4年7月15日、伊香郡愛郷会の事業として創設された。

伊香地域は滋賀県の最北部に位置し、かつて、交通は 不便、資力薄弱、衛生機関の設備はなく、医師も極めて 少なかった。病院設立の必要性は有識者間では早くから 提唱されていたが、実現には結びついていなかった。し かし、明治44年の済生会設立に際して明治天皇が出さ れた済生勅語を契機とし、愛郷会会長冨田八郎氏が中心 になり、伊香郡内の有志を集め病院設立の計画を進めた。

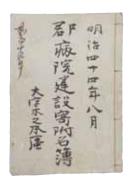
大正6年には、木之本外8ケ村組合立として伝染病隔離病舎(箱柳病院)も開設されている。



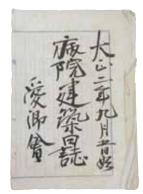
前列向かって左から2人目が冨田八郎氏



院主 冨田八郎



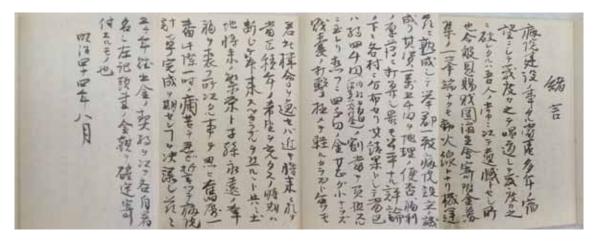
郡病院建設寄附名簿 (木之本区)



病院建築日誌 (愛郷会)



伊香病院日誌



緒 言

病院建設ノ事タル当区多年の宿望ニシテ幾度カ之ヲ唱道シテ幾度カ之ニ破レタルハ吾人ノ常々以テ遺憾トセ シ所也 今般恩賜財団済生会寄附金募集ノ一挙端ナクモ導火線トナリ機運此ニ熟成シテ挙郡一致病院設立ノ 議成り
其資一萬五千円ヲ地理ノ便否、福利ノ厚薄ニ打算シ最モ公平ナル評論ノ下ニ各村ニ分布セリ
其結 果トシテ当区ハ約四千円ノ割当ヲ負担スルニ至レリ 想フニ四千円ノ金甚ダ小ナラズ財嚢ノ打撃極メテ軽ル カラズト雖モ若此機会ヲ逸セバ近キ将来ニ於テ当区積年ノ希望ヲ満タスノ時期ハ断ジテ再来スベカラザルヲ 恐ルルト共二、土地将来ノ繁栄ト子孫永遠ノ幸福ヲ喪フ所以タル事ヲ思ヒ奮励一番此際一時ノ痛苦ヲ忍ビ 誓ッテ病院計画完成ヲ期セン事ヲ決議シ此ニ五ヵ年拠出金ノ契約ヲ以テ各自署名シ左記頭書ノ金額ヲ確定寄 付スルモノ也 明治四十四年八月

◇ 資料 冨田光彦氏提供



(北川乙治郎略伝より転載)

顧問 北川乙治郎(きたがわ おとじろう) 名古屋好生館病院 2代目院長(外科医) 伊香郡高月町西阿閉出身 病院設立当初から顧問となり手術を担当 東京帝国大学・ベルリン大学・ヴュルツブルグ大学で学ぶ

1943(昭和18)年~

日本医療団への移管と再発足

昭和16年の太平洋戦争開戦に伴い、政府はあらゆる部門にわたり強力な統制を敷き、医療部門については「日本医療団」という医療統制機関を作って全国の大小の病院、診療所の買収統制に乗り出した。

昭和18年、日本医療団から病院移譲の要請があり、院主冨田八郎は愛郷会理事や郡内各町村長に諮って譲渡することを決め、同19年5月1日から経営は日本医療団に移ることになった。また、秋には病院解散式と物故者慰霊祭が執り行われ、医療団による買収精算金は式と慰霊祭に関する費用に充て、残金は「恩賜財団済生会滋賀支部」に寄附された。

終戦後、昭和22年11月1月に日本医療団は解散された。



移管雑書



移管式書類



医療団からの挨拶状



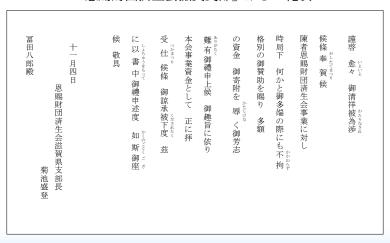
慰霊祭案内状

物故者感重察諸貴擅長 疾院解散式 諸貴擅長

◇ 資料 冨田光彦氏提供



「恩賜財団済生会滋賀支部」からの礼状



昭和22年11月の日本医療団解散後、紆余曲折があったが、伊香地方事務所長中沢貢氏の協力などにより、郡町村連合直営の国民健康保険病院として再開させることとなった。日本医療団への交渉連合会の設立およびその後の病院経営は、村長、県職を経て事務長となった近藤章一氏に委ねられた。

日本医療団の手に渡ってから6年目の昭和24年5月1日、伊香病院は元の郡立病院の姿に戻り、伊香郡民のための病院として使命を果たすことになった。買戻しと同時に増改築を行い、郡民の利用率は1年を待たずして医療団経営当時の2倍近くとなり、町村国保事業の発展に大いに貢献した。



近藤章一氏



再発足当時(前列中央は北嶋院長)



伊香病院に併設された伝染病院 (昭和27年) (木之本町箱柳から移転)

病院本館の改築及び増築



本館改築工事起工式 (昭和36年)

昭和36年本館改築工事申請(鉄筋3階建て) 同37年3月完成

敷地面積 6,007㎡ 建物面積 3,112㎡ 医師 6 名 (耳鼻科 1 名非常勤)、看護婦 19 名 X 線技師・検査技師・薬剤師 各 1 名 栄養士炊事婦 6 名、事務職その他 16 名 計 51 名 病床数 一般 42、結核 30、伝染 23 計 95 床



竣工後の本館 (昭和37年)



基礎コンクリート打ち

昭和 40 年 5 月、「伊香郡町村組合立伊香病院」から「伊香郡病院組合伊香病院」に名称変更

1969(昭和44)年~

本館増改築







昭和44年7月、4階建付近中央の地質調査が行われた結果、付近一帯が崩落堆積層のため8mの杭打ちが必要と判断された。

同45年2月、起工式終了後から杭打ちが始まったが、3月6日に40cmの積雪となり一時作業が中断した。その後、最終的に合計242本の杭打ちが完了した。



掘削作業中



杭打ち

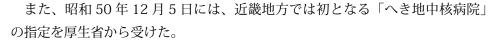


医師団総辞職・病院閉鎖と再開

時代と共に発展し、60名近い職員を有する病院となって郡民の健康を守ってきたところであったが、昭和46年度末に一部医師の辞任の意思表明から他の医師にも連鎖反応が起こり、3月31日をもって医師総辞職という最悪の事態に直面した。しかし、産婦人科の今村久郎先生だけが院長代理として残られた。

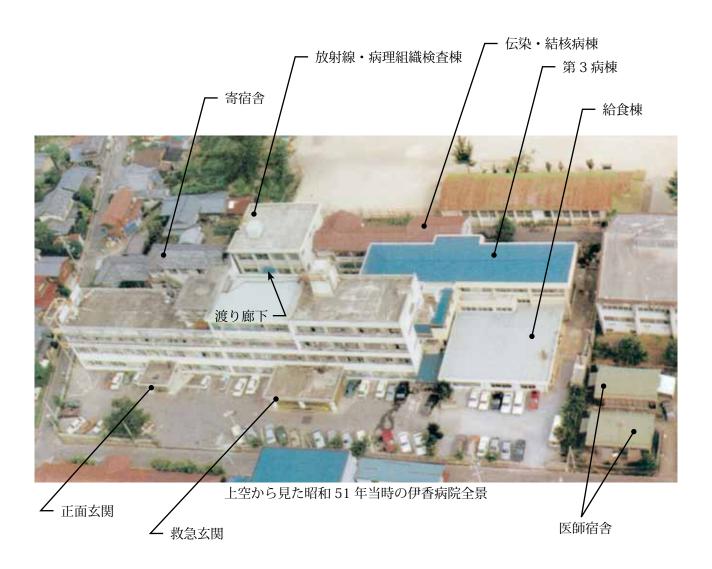
病院は一時閉鎖状態となったが、関係者の必死の努力により、昭和 47 年 8 月 16 日に京都府立医大から馬場道夫院長を迎えて再開準備が始まり、同 48 年 4 月に全面再開となった。

その後、昭和49年4月に放射線棟・病理組織検査棟の新築や医療機器の整備、5月に外科病棟・整形外科外来診察室の新築、人工透析(2床)の開設、同51年4月には伝染病隔離病舎の一部を解体し、跡地にへき地中核病院施設整備補助金を主要財源として病棟(第3病棟)を新築した。





馬場道夫院長



1978(昭和53)年~

病院新築移転「伊香郡病院組合立湖北総合病院」昭和58年3月開院

昭和53年7月7日の伊香郡病院組合議会において病院の将来計画が検討され、現在の施設の状況・規模では伊香郡民の医療需要に充分対応できないこと、また、財政的にも何らかの打開策を講じなければならない等の理由により、病院を移転新築する方針で議会側の賛同を得て計画案の作成が開始された。

同55年には病院の移転先候補地が決定され、翌年6月に新築用地の買収が完了、9月10日に工事着工となった。竣工は昭和57年11月30日、同58年3月1日に病院の名称を変更し、「伊香郡病院組合立湖北総合病院」として新たな一歩を踏み出した。



診療科目 内科、神経内科、呼吸器科、消化器科、循環器科、小児科、外科、肛門科、整形外科、形成外科、 脳神経外科、皮膚科、泌尿器科、産科、婦人科、眼科、耳鼻咽喉科、気管食道科、理学診療科、 放射線科、歯科 計 21 診療科 病床数 220 床(一般 200 床、伝染 10 床、結核 10 床) 敷地面積 23,142㎡、延床面積 10,379㎡













病院創立 70 周年記念式典挙行

創立70周年をひとつの契機とし、病院設立の原点にかえり職員一丸となって医療の起点を忘れず粉骨砕身努力していくとの強い使命感のもと、昭和60年7月15日に記念式典が挙行された。



病院併設型老人保健施設「湖北やすらぎの里」開所

滋賀県最北部の豪雪地帯である伊香郡は、山間へき地の過疎化や高齢化の進展が著しく、在宅寝たきり老人や独居老人の比率も県平均の2倍余りに達していたが、郡内には特別養護老人ホームが設置されておらず、要介護老人対策は緊急の課題であった。

そこで、平成元年4月には県下初のモデルケースとして、病院併設型の老人保健施設(30 床)を病院5階に開設するとともに、1階には作業療法室を増設した。





放射線科および内視鏡室拡張工事竣工

工期 平成6年9月~平成7年3月







MR 室 RI 室 内視鏡室

1995(平成7)年~

伊香郡広域総合保健医療福祉センター開所

老人福祉法の改正に伴い、平成7年4月には県下50市町村に先がけて「伊香郡広域総合保健医療福祉センター」が、病院北側の同一敷地内に病院組合の事業として開所された。

当センターは、老人介護支援センター、特別養護 老人ホーム「伊香の里」(70 床)、デイサービスセ ンター、ケアハウス(15 床)の全てを併設した総 合施設であり、これにより保健・医療・福祉が一体となった地域包括医療・ケアが促進されることとなった。

この年の5月28日、前年に伊香郡病院組合助役に就任された馬場道夫前院長が61歳の生涯を閉じられた。



伊香郡広域総合保健医療福祉センター

平成12年 3月 訪問看護ステーション開設

平成 15 年 11 月 湖北総合病院託児所「ひまわり園」新築工事竣工

平成16年3月 伊香の里デイサービスセンター増改築工事竣工

平成 17 年 5 月 湖北総合病院増改築工事着工

平成 18 年 增築棟竣工

昭和50年に2床で開設された透析室は、その後 の病院新築移転時に13床となったが、対象患者の 急激な増加に伴い、増築棟1階に最大30床まで増 床可能な人工透析センターが整備された。また、厨 房も本館から移動し、オール電化、ドライ厨房とし

て整備された。6月20日から、健診センター、新 病棟、厨房施設の共用が開始され、同年4月に導入 したオーダリングシステムと併せ、新しい医療提供 体制となった。



新棟 西側外観

1階=人工透析センター・厨房・検診センターなど 2・3階=病棟(96床)



新棟 南西側外観

建築面積 2,433.73㎡



透析センター 1 階



1階 セミナー室



1階 特浴室



1階 調理室



2階 スタッフステーション



2階 観察室



病室(4床) 2階



2階 渡り廊下



屋上機械置場

2009(平成21)年~

湖北総合病院改革プラン策定

地域の中核的機能をもつ基幹病院と日常的な医療を確保する病院としての両面の機能を果たしてきた当院は、過疎地域にありながら、医療福祉情勢の変化を先取りし、介護老人保健施設、特別養護老人ホーム、ケアハウス等の併設や訪問看護ステーションを開設するなど、地域の医療福祉の中心的役割を担ってきた。

しかしながら、開設町の財政状況、一般会計からの繰出増など様々な状況により、経営に対する考え方の重要性が高まり、医療と経営の両立が必要となってきた。

持続可能な運営のために、経営効率化、再編・ネットワーク化、経営形態の見直しの3つの視点に立って「病院改革プラン」が策定された。



平成 22 年 市町合併 「長浜市立湖北病院」に名称変更



平成21年3月3日、長浜市及び東浅井郡・伊香郡6町合併協定調印式が行われ、翌年1月1日の新「長浜市」誕生に向けた準備を進めることとなった。

合併により、当院は長浜市の市立病院となったことから、病院名を「長浜市立湖北病院」に変更した。

創立 100 周年記念式典挙行

先人の地域医療の維持への情熱やご苦労に想いを馳せるとともに、新たな時代の創造へと取り組む良き機会とし、創立から一世紀という永きにわたる歴史の節目とするため、記念式典を執り行った。

日 時 平成 27 年 10 月 14 日 (水曜日) 午前 10 時 00 分開式

会場 北近江リゾート「ファイブ」 長浜市高月町唐川 89

Kohoku Hospital 100th Anniversary 伊香病院・湖北総合病院・長浜市立湖北病院の出来事 明治40(1907)年 明治41(1908)年 明治42(1909)年 冨田八郎氏が病院設立の必要性を伊香郡愛郷会々員に呼びかける 明治43(1910)年 明治44(1911)年 伊香郡に病院建設の機運が高まり、建設に向けて動き始める 明治45(1912)年 大正元年 大正2(1913)年 病院建築に着手 大正3(1914)年 大正4(1915)年 「伊香病院」の創設 7月15日 | 伊香病院]の創設 | 伊香郡愛郷会(会長 冨田八郎氏)の事業として | 伊香郡木之本町大字木之本字塔寺の地に病院を創設 | 院主 冨田八郎 | 院長 横井薫(初代) 医学士 | 顧問 名古屋好生館病院長 北川乙治郎 医学博士 大正5(1916)年 伝染病隔離病舎(箱柳病院)創設 木之本外8ヶ村組合立として、木之本村字箱柳の地に伝染病隔離病舎を開設 管理者 木村 市太郎 大正6(1917)年 12月21日 大正7(1918)年 大正8(1919)年 大正9(1920)年 四月 大正10(1921)年 首在 大正11(1922)年 YIP 大正12(1923)年 + ME 大正13(1924)年 大正14(1925)年

大正15(1926)年 昭和元年

昭和2(1927)年

昭和3(1928)年

昭和4(1929)年 昭和5(1930)年

昭和6(1931)年 昭和7(1932)年

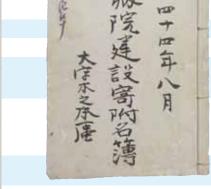
昭和8(1933)年

昭和9(1934)年

昭和10(1935)年 昭和11(1936)年

昭和12(1937)年





冨田八郎氏



創立当時の病院の正面玄関

	医学·医療		社会·世相	
				明治40(1907)年
				明治41(1908)年
	日本薬剤師会が社団法人となる	10月26日	伊藤博文元総理大臣、ハルビン駅で暗殺される	明治42(1909)年
			日韓併合	明治43(1910)年
	恩賜財団済生会設立			明治44(1911)年
5月10日	毒物劇物営業取締規則制定	4月15日	豪華客船タイタニック号沈没	明治45(1912)年 大正元年
				大正2(1913)年
	北里研究所設立	7月28日	第1次世界大戦勃発	大正3(1914)年
		1月18日 1月25日	対華21ヶ条要求 米価調整令公布	大正4(1915)年
4月1日 11月10日	東京大学附属伝染病研究所設立 大日本医師会設立			大正5(1916)年
			ロシア革命	大正6(1917)年
	スペイン風邪流行	8月6日	第1次世界大戦終結	大正7(1918)年
	精神病院法・トラホーム予防法制定			大正8(1919)年
		1月10日	国際連盟発足	大正9(1920)年
		11月4日	原敬総理大臣、東京駅で刺殺される	大正10(1921)年
4月22日	健康保険法制定	11月17日	アインシュタイン博士来日	大正11(1922)年
11月23日	法定の日本医師会設立	9月1日	関東大震災	大正12(1923)年
				大正13(1924)年
	日本生化学会設立 薬剤師法公布		普通選挙法制定	大正14(1925)年
	日本整形外科学会設立 日本伝染病学会設立 薬剤師会令公布	8月16日 12月25日	日本放送協会設立 大正天皇崩御	大正15(1926)年 昭和元年
		12月30日	東京に地下鉄開通	昭和2(1927)年
5月21日	ペニシリンの発見 野口英世博士、黄熱病で死去	11月1日		昭和3(1928)年
			ウォール街株式暴落、世界恐慌へ	昭和4(1929)年
		11月26日 12月23日	北伊豆地震 大日本連合婦人会結成	昭和5(1930)年
	癩(らい)予防法制定	9月18日	満州事変勃発	昭和6(1931)年
		5月15日	5.15事件	昭和7(1932)年
		3月3日 3月27日	三陸沖地震 日本、国際連盟脱退	昭和8(1933)年
	癌研究会研究所および附属病院開設		室戸台風上陸	昭和9(1934)年
				昭和10(1935)年
		2月26日	2.26事件	昭和11(1936)年
4月5日	保健所法制定		日中戦争	昭和12(1937)年

	伊香病院・湖北総合病院・長浜市立湖北病院の出来事	
昭和13(1938)年		
昭和14(1939)年		
昭和15(1940)年		
昭和16(1941)年		
昭和17(1942)年		
昭和18(1943)年	7月22日 日本医療団から伊香病院を解散・移管するよう要請あり	
昭和19(1944)年	伊香病院が日本医療団により買収統制される 11月12日 伊香病院解散式挙行	
昭和20(1945)年		
昭和21(1946)年		
昭和22(1947)年	11月29日 院主 冨田八郎逝去(急性肺炎)	0
昭和23(1948)年	北嶋院長(前列中央)	
昭和24(1949)年	4月30日 日本医療団から病院を買い戻す 5月1日「伊香郡国民健康保険団体連合会直営伊香病院」として再開 院 長 北嶋精智(第6代) 病 床 数 一般病床25床 診療科目 内科、外科、小児科、産婦人科、眼科、耳鼻咽喉科、物療科	
昭和25(1950)年	3月1日 伊香病院高時出張診療所を開設	
昭和26(1951)年	8月16日 結核予防法指定医療機関の指定を受ける	
昭和27(1952)年	3月1日 入院患者に対し完全給食を開始 3月26日 伝染病院を伊香病院に併設 4月8日 伝染病院移転新築	
	伝染病院を木之本町箱柳から木之本町木之本723番地に新築移転 8月1日 生活保護法による医療扶助として行う完全給食を実施	
昭和28(1953)年	4月1日 旧伝染病院跡を木之本町母子寮に転用	
昭和29(1954)年	4月1日 「伊香郡木之本町外12ヶ村組合立伊香病院」に名称変更 管理者 藤田甚左エ門 構成町村は次のとおり 木之本町、杉野村、高時村、北富永村、南富永村、古保利村、七郷村、伊香具村 余呉村、丹生村、片岡村、塩津村、永原村(以上13町村)	`
昭和30(1955)年	8月5日 「伊香郡町村組合立伊香病院」に名称変更 管理者 西島由太郎(高月町長)	
昭和31(1956)年		Ď.
昭和32(1957)年	7月15日 健康保険法による保険医療機関の指定を受ける 本館改築工事起工	rt.
昭和33(1958)年	10月1日 基準給食設備の承認を受ける	`

医学·医療		社会•世相	
1月11日 厚生省設置		国家総動員法制定	昭和13(1938)年
		第2次世界大戦勃発	昭和14(1939)年
	9月27日	日独伊三国間条約締結(三国同盟)	昭和15(1940)年
4月5日 日本癌学会設立 7月10日 保健婦規則制定	12月8日	太平洋戦争勃発 国民学校令公布	昭和16(1941)年
国民医療法制定 日本医療団設立	国は日本医 全国の病院	療団という医療統制機関を組織し、 3・診療所を買収統制する。	昭和17(1942)年
3月12日 薬事法制定 ストレプトマイシンの発見		学徒出陣	昭和18(1943)年
		サイパン島陥落、 本土への爆撃が本格化	昭和19(1944)年
	8月14日	広島・長崎に原爆投下 ポツダム宣言受諾 太平洋戦争終結	昭和20(1945)年
日本産婆看護婦保健婦協会設立	1月1日 11月3日	天皇人間宣言 日本国憲法公布	昭和21(1946)年
11月1日 日本医療団解散		教育基本法・学校教育法制定 ベビーブーム	昭和22(1947)年
7月30日 医療法·医師法制定 〃 保健婦助産婦看護婦法制定	6月28日	ソ連がベルリンを封鎖 福井地震発生 死者 3,7 6 9 人	昭和23(1948)年
	4月23日 10月7日 10月1日 11月3日	1ドル360円の為替レート (固定相場制)決定 東独の成立により東西ドイツが分裂 中華人民共和国建国 湯川秀樹博士日本人初の ノーベル賞受賞	昭和24(1949)年
5月1日 精神衛生法制定	6月25日	朝鮮戦争勃発	昭和25(1950)年
	9月8日	日米安保条約調印	昭和26(1951)年 昭和27(1952)年
	2月1日		昭和28(1953)年
国内初の人間ドック (国立東京第一病院)	3月1日 7月1日	米、ビキニ島で水爆実験 (第五福龍丸事件) 自衛隊発足	昭和29(1954)年
森永ヒ素ミルク中毒事件	9月10日	日本がGATTに加盟	昭和30(1955)年
医薬分業制度の実施	10月19日 12月18日	日ソ国交回復 国連加盟決定	昭和31(1956)年
原子爆弾被爆者の医療に関する法律制定 日本形成外科学会設立	10月4日	旧ソ連、人工衛星第1号の打上げに成功	昭和32(1957)年 昭和33(1958)年

	伊香病院・湖北総合病院・長浜市立湖北病院の出来事
昭和34(1959)年	
昭和35(1960)年	
昭和36(1961)年	
昭和37(1962)年	3月1日 病院本館の改築および増床 10月1日 伊香病院高時診療所を廃止
昭和38(1963)年 昭和39(1964)年	
昭和40(1965)年	5月25日 「伊香郡町村組合立伊香病院」を「伊香郡病院組合伊香病院」に名称変更 12月1日 基準看護(2類)、基準寝具の承認を受ける 12月7日 障害年金再診医療機関の指定を受ける
昭和41(1966)年	
昭和42(1967)年	
昭和43(1968)年	昭和 43 年当時の職員 (病院前にて)
昭和44(1969)年	4月1日 労災保険指定医療機関の指定を受ける 6月1日 健康保険医療機関の指定を受ける
昭和45(1970)年 昭和46(1971)年	11月1日 病院本館等増改築 8月11日 児童福祉施設(助産施設)の設置認定を受ける
昭和47(1972)年	4月1日 医師団総辞職のため病院閉鎖
	院長代理 今村久郎(産婦人科医師) 8月16日 新院長 馬場道夫(第10代)を迎え再開準備
昭和48(1973)年	4月1日 診療再開
昭和49(1974)年	4月1日 放射線・病理組織検査棟の新築および医療機器の整備 5月15日 外科病棟および整形外科外来診療室の新築 人工透析(2床)の開設 10月1日 国民健康保険親元病院の指定を受ける
昭和50(1975)年	1月1日 身体障害者福祉法第19条の2の規定による更生医療を担当する医療機関の指定を受ける 担当すべき医療の種類 腎蔵に関する医療 12月5日 へき地中核病院の指定を受ける

	医学•医療		社会•世相	
7月22日	熊本大学、水俣病の原因は有機水銀と発表	1月1日 9月26日	キューバ革命 伊勢湾台風上陸	昭和34(1959)年
		9月10日	カラーテレビ放送開始 ベトナム戦争勃発	昭和35(1960)年
4月1日	国民皆医療保険制度スタート 日本胸部疾患学会設立 西独でサリドマイドによる 奇形児問題発生	8月13日	ベルリンの壁が築かれる	昭和36(1961)年
			キューバ危機	昭和37(1962)年
7月11日	老人福祉法制定	11月22日	米、ケネディ大統領暗殺される	昭和38(1963)年
7月1日	母子福祉法制定	9月28日 10月1日 10月10日	琵琶湖大橋開通 東海道新幹線開業 東京オリンピック開幕	昭和39(1964)年
6月12日	新潟大学教授が阿賀野川流域で 水俣病発生と発表(新潟水俣病)	2月7日	米軍による北爆開始	昭和40(1965)年
4月7日	チフス菌の人体実験により、 千葉大附属病院の医師逮捕	5月16日	中国文化革命	昭和41(1966)年
3月12日 8月3日 9月3日	青年医師連合がインターン制度に 反対して国家試験ボイコット 公害対策基本法制定 医薬品の製造承認等に関する 基本方針発表(厚生省) イタイイタイ病が公害病となって 問題化	10月8日	第一次羽田事件 東南アジア諸国連合(ASEAN)設立	昭和42(1967)年
1月29日 5月8日 8月8日 9月26日	東京大学医学部、無期限ストに突入厚生省、イタイイタイ病を公害病として認定インターン制度廃止 国内初心臓移植手術(札幌医科大学)厚生省、水俣病は「チッソ」が排出したメチル水銀が原因と発表	7月2日 12月10日	東京大学安田講堂バリケード封鎖 三億円事件	昭和43(1968)年
	厚生省、チクロの使用を禁止	7月20日	アポロ11号が月面着陸に成功	昭和44(1969)年
7月1日	環境庁設置	3月14日	日本万国博覧会開幕	昭和45(1970)年 昭和46(1971)年
		2月3日 2月19日 5月15日 9月29日	札幌オリンピック開幕 あさま山荘事件発生 沖縄返還 日中国交正常化	昭和47(1972)年
1月1日	老人福祉法の改正により70歳以上の医療費が無料になる	10月6日	第4次中東戦争勃発	昭和48(1973)年
10月24日	国際がん学会で 丸山ワクチン発表	5月15日	セブンイレブン1号店出店	昭和49(1974)年
	日本最大のがんセンター、 都立駒込病院開院	4月30日	ベトナム戦争終結	昭和50(1975)年

		伊香病院・湖北総合病院・長浜市立湖北病院の出来事
昭和51(1976)年	4月26日 11月22日 12月1日	病棟増築 伝染病隔離病舎を解体(伝病舎は結核病棟へ移設)し、その跡地に へき地中核病院施設整備補助金を主要財源として病棟(第3病棟)を新築 保助青学校養成所指定規則第7条第1項第3号による成人看護の法定 臨床実習生の受入れ開始 身体障害運動療法の施設基準に係る承認
昭和52(1977)年	9月1日 11月1日	基準看護(特1類)の承認を受ける(ただし結核病棟は従来どおり2類看護) 伊香病院中河内診療所および伊香病院古保利診療所について、 保険医療機関として正式承認を受ける
昭和53(1978)年	1月31日 7月7日	排水処理施設の整備 病院移転改築について検討はじまる
昭和54(1979)年	4月5日	滋賀県立特別養護老人ホーム「福良荘」への出張診療を開始
昭和55(1980)年	4月1日	西浅井町塩津診療所への出張診療を開始
昭和56(1981)年	9月10日 10月1日	伊香病院移転改築工事着工 救急病院等を定める省令第1条の規定に基づく救急病院の指定を受ける
昭和57(1982)年	11月30日	新病院新築工事竣工
昭和58(1983)年	3月1日	「伊香郡病院組合立湖北総合病院」と名称変更して開院 診療科目 内科、神経内科、呼吸器科、消化器科、循環器科、小児科、外科、 肛門科、整形外科、形成外科、脳神経外科、皮膚科、泌尿器科、産科、 婦人科、眼科、耳鼻咽喉科、気管食道科、理学診療科、放射線科、歯科 計21診療科 病床数 一般病棟 200 伝染病棟 10 結核病棟 10 計 220床
	11月30日	敷地内にバス停を設置 旧病院第3病棟を用途変更し、看護婦宿舎として改修
昭和59(1984)年		
昭和60(1985)年	7月15日	病院創立70周年記念式典を挙行
昭和61(1986)年		
昭和62(1987)年		
昭和63(1988)年	7月4日	病院併設型老人保健施設、その他増改築工事着工
昭和64(1989)年	3月25日	老人保健施設、その他増改築工事竣工 老人保健施設(5階に設置)
平成元年	4月1日	理学作業療法室(1階に増設)
	,,,,,	名が、一般募集と、湖北やすらぎの里」と選定される)
	12月1日	老人保健施設に特別浴室およびデイケアルームを追加増設 理学診療科作業療法施設の承認を受ける
平成2(1990)年		
平成3(1991)年		
平成4(1992)年		

	医学•医療		社会•世相	
	日本医大の丸山千里教授 、 丸山ワクチンの新薬認定申請を 厚生省に提出	7月27日	ロッキード事件 (田中角栄前総理逮捕)	昭和51(1976)年
			日本の平均寿命が世界一に (男72.69歳、女77.95歳)	昭和52(1977)年
7月25日	英で世界初の体外受精児誕生			昭和53(1978)年
	世界保健機関(WH0)が天然痘根絶を宣言	4月7日	イラン革命 北陸自動車道開通(敦賀〜米原間)	昭和54(1979)年 昭和55(1980)年
10月1日	丸山ワクチン「有償治療薬」として 認められる	4月12日	スペースシャトル宇宙初飛行 (コロンビア号)	昭和56(1981)年
	老人保健法制定	2月8日	ホテルニュージャパン火災	昭和57(1982)年
10月14日	国内初の体外受精児誕生(東北大学)	4月15日	東京ディズニーランド開園	昭和58(1983)年
	薬価基準18.6%引下げを告示	3月18日 6月30日	グリコ・森永事件発生 日本人の平均寿命(男74.2歳、 女79.8歳となり「世界一の長寿国」と 厚生省が発表	昭和59(1984)年
	日本人初のエイズ患者認定	8月12日	日航ジャンボ機が御巣鷹山に墜落	昭和60(1985)年
		4月26日 11月15日	チェルノブイリ原発事故 伊豆大島三原山噴火	昭和61(1986)年
	精神保健法制定 利根川進教授 (米マサチューセッツ工科大) ノーベル医学生理学賞受賞	4月1日 12月8日	国鉄民営化(JRとなる) 米ソ、中間距離核ミサイル(INF)全廃 条約に調印	昭和62(1987)年
4月8日	京都大学、遺伝子実験施設を設置	3月18日	東京ドーム完成	昭和63(1988)年
12月25日	日本初の凍結受精卵での体外受精児 誕生	6月4日 11月9日	昭和天皇崩御 消費税法施行(税率3%) 天安門事件 ベルリンの壁崩壊 米ソ首相、マルタ会談で 東西冷戦終結宣言	昭和64(1989)年 平成元年
		10月3日	東西ドイツ統一	平成2(1990)年
12月18日	骨髓移植推進財団設立	1月17日 6月3日 12月25日	湾岸戦争勃発 雲仙普賢岳で火砕流が発生 ソ連崩壊	平成3(1991)年
	脳死臨調「脳死容認」を答申 日本医師会、尊厳死を容認	1月11日	大学入試センター試験が始まる	平成4(1992)年

		伊香病院・湖北総合病院・長浜市立湖北病院の出来事
平成5(1993)年	4月29日 7月1日 10月1日 12月6日	馬場道夫院長 藍綬褒章受賞 週休2日制導入(水・日曜日休診閉庁) 心身障害児通園事業の移管(伊香郡心身障害児地域療育事業運営協議会より)を受ける 伊香郡広域総合保健医療福祉センター起工式
平成6(1994)年	9月14日	放射線科および内視鏡室拡張工事起工式
平成7(1995)年	3月15日 4月1日 5月28日	放射線科および内視鏡室拡張工事竣工 伊香郡広域総合保健医療福祉センター開所 馬場道夫助役 逝去
平成8(1996)年	9月19日	金居原巡回診療所開所式 (10月4日から診療開始、木之本町から管理委託を受ける)
平成9(1997)年		
平成10(1998)年	9月30日 12月10日	古保利診療所廃止 結核病棟(10床)廃止
平成11(1999)年	3月31日 8月1日	伝染病棟(10床)廃止 一般病床205床を200床に変更 介護認定審査会事務室の設置
平成12(2000)年	3月1日	一般病床200床を190床に変更(うち療養型35床) 訪問看護ステーションの設置
平成13(2001)年		
平成14(2002)年		
平成15(2003)年	11月30日	湖北総合病院託児所「ひまわり園」新築工事竣工
平成16(2004)年	3月31日	「伊香の里」デイサービスセンター等増改修工事竣工
平成17(2005)年	5月20日	湖北総合病院増改築工事着工
平成18(2006)年	3月31日	湖北総合病院増築棟竣工 2・3階 = 96床 1階 = 人工透析センター・厨房等
	4月1日 5月31日 6月20日	2・3階 = 96床 1階 = 人工透析センター・厨房等 オーダリングシステム導入 湖北総合病院増築工事(外溝および渡り廊下)竣工 健診センター業務開始 新病棟・厨房施設共用開始
平成19(2007)年	2月28日	病院增改築工事完了 共用開始
平成20(2008)年		
平成21(2009)年	3月3日 4月13日	湖北総合病院改革プラン公表 長浜市および東浅井郡・伊香郡6町合併協定調印式 伊香郡病院組合運営協議会開催 福祉施設事業の経営形態を「公設民営」とし、指定管理者制度を導入することに決定
	9月30日 12月15日	介護認定審査会事務および障害児通園(デイサービス)事業を移管する 病院本館4階改修工事完了
平成22(2010)年	1月1日 4月1日	1市6町合併により新長浜市が誕生し「長浜市立湖北病院」に名称変更 地方公営企業法の全部適用を開始(長浜市病院事業) 一般病床45床(旧C病棟)を介護老人保健施設に転換し、 介護老人保健施設「湖北やすらぎの里」を30床から84床に増床
平成23(2011)年		
平成24(2012)年	3月26日	長浜市病院事業改革プラン「改訂版」公表
平成25(2013)年	40835	#Butterfer control - >). (optical total t
平成26(2014)年		一般病床96床のうち、48床を地域包括ケア病棟に移行
平成27(2015)年	7月15日 10月14日	創立100周年記念日 創立100周年記念式典挙行

	医学•医療		社会·世相	
1月28日	日本骨髄バンクによる初の骨髄移植 遺伝子治療ガイドラインを公表	11月1日	EU誕生 青色LED実用化	平成5(1993)年
		6月27日	松本サリン事件	平成6(1994)年
7月27日	日本医療機能評価機構設立 国内初の遺伝子治療を実施 (北海道大学)、A D A 欠乏症に対して	1月17日 3月20日	阪神淡路大震災 地下鉄サリン事件	平成7(1995)年
3月31日	らい予防法廃止 0-157による集団食中毒発生	12月17日	ペルー日本大使館人質事件	平成8(1996)年
6月7日 10月16日	患者負担増を柱とする医療保険制度 改正関連法案が衆院で可決、成立 臓器移植法施行	12月11日	気候変動に関する国際連合枠組 条約の京都議定書作成	平成9(1997)年
		2月7日	長野オリンピック開幕	平成10(1998)年
1月11日	患者取違え手術事件 (横浜市立大学附属病院)	1月1日 3月24日	EUの統一通貨としてユーロが誕生 NATOがユーゴ空爆	平成11(1999)年
4月1日	介護保険法施行	6月13日	朝鮮半島で初の南北首脳会談	平成12(2000)年
5月11日 9月10日	ハンセン病訴訟、国の賠償責任認める 国内初の狂牛病確認	9月11日	米同時多発テロ	平成13(2001)年
3月	保健師助産師看護師法に名称変更			平成14(2002)年
4月	医療保険制度改定(加入者本人が3割負担に)	4月1日	日本郵政公社設立	平成15(2003)年
4月	新医師臨床研修制度開始	2月8日	自衛隊イラク派遣	平成16(2004)年
	合計特殊出生率が戦後最低に(1.26%)		平成の大合併	平成17(2005)年
		8月24日	太陽系から冥王星が除外	平成18(2006)年
11月	京都大学の山中伸弥教授、人工多能性幹細胞(iPS細胞)発表		食品偽装横行	平成19(2007)年
4月1日	後期高齢者医療制度開始		リーマンショック	平成20(2008)年
7月17日	新型インフルエンザA(H1N1)流行 改正臓器移植法全面施行	1月20日 5月21日	オバマ大統領就任裁判員制度施行	平成21(2009)年
		6月13日	小惑星探査機(はやぶさ)、7年ぶりに 地球へ帰還	平成22(2010)年
		3月11日	東日本大震災	平成23(2011)年
	京都大学の山中伸弥教授、ノーベル医学生理学賞受賞			平成24(2012)年
		6月22日	富士山が世界文化遺産に登録される	
	STAP細胞騒動			平成26(2014)年
10月	北里大の大村智博士、 ノーベル医学生理学賞受賞	10月	マイナンバー制度施行	平成27(2015)年

職員のきずなを深めて 親睦会活動



ボーリング大会(昭和62年9月)



職員旅行(昭和40年10月)



ガーデンバーベキューの夕べ(平成4年9月)



職員旅行(昭和63年10月)



忘年会(平成5年)



職員旅行(平成2年5月)

寄稿文

特別寄稿

伊香病院の創設、そして解散と買戻し・再開について

冨田光彦(創設者の孫)

この度、湖北病院が創設百周年を迎えられたことを、心よりお慶び申し上げます。

湖北総合病院・湖北病院の前身である伊香病院がどのような経緯で創設されたのか。そして先の大戦中に 「日本医療団」に経営が移管されたものを、どのようにして再び地元の病院として生き返えらせることがで きたのか。それを直接知る人はもうこの世にはおられません。しかし、書面や伝聞によってそれを知る数少 ない一人として、百周年の機会にその経緯を述べておきたいと思います。

病院設立の動機は、明治 40(1907)年、祖父冨田八郎が虫垂炎(盲腸炎) を患ったことにあります。当 時の日本では虫垂切除の成功例は極めて少なく、命にかかわる病気でした。伊香郡西阿閉出身で日本外科学 会最高峰の一人であり、外科手術の草分けでもあった北川乙治郎博士(名古屋好生館病院院長、東京帝国大学・ ベルリン大学・ヴュルツブルグ大学で学ぶ)でさえ、10年間に行った虫垂手術はわずか 52 例で、その死亡 率は15.3%という状況でした(「第3回日本外科学会宿題報告」京都府立医科大学麻酔科学教室調べ)。しかし、 祖父は、幸いにも北川乙治郎院長の執刀による8時間におよぶ手術と3ヶ月の入院のおかげで、その命を救 われたのでした。

この手術の成功経験から、祖父は地元に最先端の病院を設立する必要性を痛感し、明治 41(1908)年、 退院すると直ちに病院設立の行動に出ます。地元には反対があり、計画は頓挫しかけました。しかし明治 44(1911)年、明治天皇の『済生勅語』により「医療で窮民を済(すくう)、医療で地域の生(いのち)を 守る」を目的とした「恩賜財団済生会」が設立されたことを契機に、祖父は「…財嚢ノ打撃極メテ軽カラザ ルト云エドモ、モシコノ機会ヲ逸セバ近キ将来ニオイテ積年ノ希望ヲ充タス時期ハ断ジテ再来スルベカラズ ヲ恐ルルト共ニ、土地将来ノ繁栄ト子孫永遠ノ幸福ヲ喪ウ所以タル事ヲ思イ奮励一番、コノ際一時ノ苦痛ヲ 忍ビ、誓イテ病院計画完成ヲ期セシコトヲ決議シ・・・」と檄を飛ばしました。

これを導火線として苦節の末、大正4(1915)年7月、北川乙治郎博士を顧問に、安城市の社団法人共 済療院(通称 安城病院)より横井薫医学士を院長に、三重県から森轍郎医師を副院長に迎え、「伊香郡愛郷 会」の事業として伊香病院が発足したのでした。爾来、北川顧問は終生、月に1~2度名古屋から来院し、 診察や難しい手術に携わられたとのことです。

このようにして、伊香病院は高水準の医療を提供し、順調に運営されていました。しかし、事態は一変し ます。戦時下の昭和 17(1942)年 4 月、国は全国の病院・診療所を買収統制する目的で「日本医療団」(以 下「医療団」)という機関を作りました。そして昭和 19(1944)年 11 月 9 日、買収金として 13 万円の提 示がなされ、伊香病院の経営は「医療団」に移管されることになったのです。

これに伴い、院主冨田八郎は断腸の思いで11月12日、伊香病院の解散式 を挙行しました。参列者は滋賀県庁職員、伊香郡内外医師、伊香郡町村長、伊 香郡官公庁所(署)長、伊香病院関係物故者遺族、伊香病院院主・院長・医師・ 理事・薬剤師・書記・看護婦長・看護婦・車夫等、そして医療団から副参事・ 深尾辰男院長・事務長等、総計 118 名でした。解散式典に続いて、北川顧問ほ (伊香病院移管式書類と移管雑書) か 15 名の物故者の慰霊祭が挙行されました。医療団による買収清算金は一部、 式典・慰霊祭挙行費用、記 念品等に充て、残金はすべて「恩賜財団滋賀支部」へ寄附されました。



その後北川乙治郎・横井初代院長ほか、多数の遺族から丁寧な礼状が寄せられました。北川顧問の長男重 夫氏の書簡 (11 月 19 日付) には「…日本医療団に移管され、その式を挙行され…亡父の霊に対してこれが 報告なされ恐縮に存じます…伊香病院は亡父にとり、ことのほか縁故深き病院でありました…医療団へ移管後も従来に増し、隆盛に向かはむことを祈念するものに存じます…」と、あります。

このようにして、伊香病院は深尾院長のもと医療団により運営が開始されました。ところが3年後の昭和22 (1947) 年11月1日、「医療団」は戦後処理の一環として解散されることとなったのです。そのため、買収されていた病院は「医療団」の処分財産となり、清算が完了し現実に解散されるまでは「医療団」が運営し、その後は、公立の機関が買い取らなければ消滅するという措置が取られることになりました。

旧伊香病院の経営母体・「伊香郡愛郷会」は公立機関ではありません。戦後の荒廃・窮乏期に郡や町に買い取る資金はなく、公立にすることが果たして直ちに合意されるだろうか。旧院主冨田八郎は悩みに悩んだ挙句「地元から病院をなくしてはならない。何としてもこれを買取り、再開の道を確保する」ことを決断。急遽町村長や愛郷会理事等に諮り、近い将来旧伊香病院を公立とすることを前提に、買い戻す手続きを進める合意を取りつけました。そして、冨田家先祖伝来の骨董のうち価値あるものはすべて売却、それに GHQの農地改革による農地買収代金全額、加えて銀行から借りられる限りの借金をし、どうにか 11 月下旬に『買取り保証金』相当額を確保することができました。それを木之本町助役美濃部八右衛門と息子冨田国士(後に八右衞門)に厚生省へ届けさせ、「これを旧伊香病院の『買取り保証金』とし、近い将来公的機関が買い戻します」と伝えさせ「医療団」の了承を取り付けたのでした。その直後、11 月 29 日、旧院主冨田八郎は急逝しました。

旧院主の没後、公立病院にするとの合意に異を唱える者もありました。しかし、2年余に及ぶ議論の末、祖父が生前意図していた伊香郡町村連合直営の公立病院とすることが決議され、買戻し金残額の支払いを完了し、昭和24(1949)年5月1日、再び旧来の伊香病院として復活したのでした。

伊香病院はその後、湖北総合病院、湖北病院と名称を変え、多くの人の医療に大きな貢献をされてきました。 しかし、その間、不祥事のため犠牲者を出すという悲しい出来事があったことは、かえすがえすも残念です。 それにしても、過去1世紀の歴史を振り返り、様々な形で当病院にかかわってこられ、既に紫雲の彼方に おられる多くの先人に想いを致すとき、次の1世紀に向けて湖北病院が地元の人々にとってかけがえのない 医療機関としてさらに充実・発展されることを衷心より願うや切であります。



ドイツにおける日本人留学生達 (石黒陸軍省医務局長を迎える)





コッホ博士と共に北川乙治郎 顕治41年(1908)7月30日

特別寄稿

冨田八郎槍堂翁と私

故北嶋精智(元院長)

伊香病院は大正4年に創立され、いろいろ曲折はあったが郡内唯一の病院としての使命を果たしつつ発展して、昭和37年3月現在のように改築されたのである。

新装された病院の前に立つ時、私の瞼には伊香病院の創設者故冨田八郎翁の姿が浮び、郡民の福祉厚生のために、病院の育成と発展を生涯の信念とし念願としておられた事に思いを至すと共に、57年の間、風雪に堪えて来た古色蒼然たる今は無き木造の病院をなつかしみ、20余年の歳月をその中で過ごして来た私の過去を振り返り、感慨無量である。

翁のこの信念と念願を受け継いだ次の時代の人々の努力によって、今日の如き近代的病院となったのであるが、郡民を思う翁の信念は病院を支えている土の中に深く深くしみ込んでいると思うのである。

翁は明治9年10月4日、坂田郡伊吹村上野の松島家に生れ、幼時木之本町の酒醸家、冨田忠利家に迎えられたのである。生れ乍らにして栄邁の誉れ高く、剛毅不屈の人であった。

明治36年、28歳にして郡会議員に選ばれ、直ちに郡会議長となったのを初めとし明治40年から大正4年まで県会議員として活躍し、昭和3年には衆議院議員に当選されている。

伊香郡いや滋賀県の先覚者であり指導者であった。

槍堂と号し古武士を思わせる風格を備え清廉潔白な人格者であり偉大な政治家であった。

滋賀県の最果て伊香郡の文化産業経済衛生等あらゆる面に於て南部に比べて著しく遅れているのを早くから嘆いておられたのであるが、大正8年県会に於いてびわ湖1周道路建設の議起るや産業の振興は道路の整備からと時の県会議員横関幸吉氏らと共に、県会に或は国会に働きかけ東奔西走、賤ケ岳隧道の開さく或は月出隧道、大崎地区の隧道等7つの隧道を開さくし、昭和2年海津木之本間の産業道路の完成を見るに至った。

大正8年木之本町長時代には、木之本実科女学校を創立し、私財を投じて内容を整備され、又伊香農学校を県立に昇格させ、続いて県立木之本高等女学校にしたのである。文化方面に於いては社会教育の一環として江北図書館を造り、年々その充実をはかり、日本全国にも稀有な貴重な蔵書を持つに至ったことは識者のよく知るところである。

又経済界に於いては江北銀行頭取、滋賀県合同貯蓄銀行、滋賀農工銀行等の重役をつとめ、或は滋賀県農会長、滋賀県酒造連合会長として活躍し、又山十製絲工場の経営に参画するなど各方面に卓絶せる手腕を発揮しておられたのであるが、就中、医療衛生に関しては、絶大なる関心を持ち情熱を持っておられた。

当時郡内に診療医師は極めて少く医師皆無の時もあったと聞く。重病人が出ると戸板に乗せて遥々長浜まで運ばねばならなかった。

この悲惨なる状態に深く心を痛めておられたのであるが、明治44年恩賜財団済生会基金募集が行われたのを動機として、済生施設として病院建設を企図し、一部に反対もあったが西山利吉、横関幸吉、千田伊平、大森七三郎、竹原正一氏等と共に郡民を説得し、浄財1万5千円を集め、相救社より6千円の寄附を得て、借入金3千円、計2万4千円をもって、大正4年、伊香病院を創設したのである。翁は愛郷会より推されて院主となり運営を任されたのである。愛知県安城病院長、横井薫氏を院長とし、森徹郎氏を副院長とし、西阿閉出身で名古屋好生館病院長北川乙治郎氏を顧問として、当時としては最新のレントゲン、太陽燈その他の医療設備を整え、大正4年7月15日診療を開始したのである。

済生会の主旨を体し、博愛公益に徹し、営利を求めず郡民奉仕を目的として最新の医療を郡民平等に普及さすことを願って、貧困者には無料診療するなど親しみやすく、行きやすい病院として発足し、郡民の衛生保健に貢献して来た。その後、時として経営困難な時もあったが、長谷川良三、山路清平、大村孫太、谷口久次郎氏らを相談役とし、田川雅太郎、東野弥治郎ついで田中伍一郎氏らを事務長として困難を切り抜け、

昭和19年5月1日、日本医療団に13万余円で譲渡するまで翁は愛郷会長とし、院主として運営を続けて来たのである。翁の生涯は、無私無欲、小事に拘泥せず、大局に高処し、常に郡民の休戚を以って己が任となし、伊香病院の充実発展を願いつつ、昭和22年11月29日、71歳を以ってその生涯を閉じられたのである。その後、日本医療団の解散により、171万円で買収の上、昭和24年5月1日伊香郡国民保険団体連合会の直営病院として今日に至っているのである。

翁は伊香病院の産みの親であり育ての親であった。滋賀県の偉大な先覚者であり開拓者であり、伊香郡民の恩人である。

私は昭和15年10月翁に招かれ、京都大学から派遣されて伊香病院長として赴任したのであるが、翁の信念を己が信条として、僻地伊香郡民の診療に尽瘁して来たつもりである。路なき雪の断崖をよじて丹生の山奥に、或時は流汗淋漓12キロの雪路を金居原まで歩き、或は余呉湖を渡り、又大浦から小舟に身を託して吹雪に頬を叩かれ乍ら菅浦にたどりつき診療するなど、又中河内の大火の時は、米軍のヘリコプターに医薬品と食糧を積んで火の手をめざして飛んでいったことなど、思えば郡内私の足跡を残さない所は無いくらいである。

清貧に甘んじ、痩軀を酷使すること20年、湖北の風雪に堪えて来たのであるが、齢既に中老、朔風冽々として身にしむに至り、新築竣工式を終えて昭和37年3月病院を去った。 かくして私の第一の人生は終わったのである。

その後、翁の御曹子冨田八右エ門氏の温情により、現在地にささやかな診療所を開くことが出来た。権力 と謀略に心を傷められることもなく、又痴人に叱咤されることもなく、己の信条に生きるべく第二の人生の 生き甲斐として、伊香郡民を友として10年を経て今日尚診療に励んでいるのである。

病院はその後、次ぎ次ぎと新らしい人を迎え、かつ送り出して、順風に帆をあげるがごとく平穏に進んでいたのであるが、昭和47年3月東旋風まき起り閉鎖同然潰滅の危機にあること数ヶ月、町当局者達の必死の奔走により馬場道夫院長を迎えることが出来た。馬場院長のたくましき陣頭指揮によって病院再建の道は開かれたのである。郡民は喜びと期待とをもって、郡内唯一の総合病院として、又郡民と共に在る病院として充実発展して行くことを願っているのである。

翁と苦楽を共にした院長、副院長は次の通りである。

院	長	初代	横井	薫	副院長	初代	森	徹郎	7代 月	劦桐 -	_
		2代	吉村	良行		2代	滝川	寛	8代 🤈	大西寅太	大郎
		3代	馬場	陽一		3代	小谷嘉	嘉治郎	9代 柞	寸上 #	青作
		4代	篠山	誠之		4代	ШΠ	英夫	10代	浜野	真
		5代	藤田	恒男		5代	加藤	久雄	11代	辻田	広雄
		6代	北嶋	精智		6代	山路	貞正			

私は翁に仕えた最後の院長として、又最も長期間病院をあずかった医師として、又一住民として、翁の遺徳をしのび、伊香病院の辿って来た道を振り返ると共に、現在の姿を眺めつつ感慨にふけるのである。体力衰えたりとはいえ、私は今後共心静かに清らかに巣林一枝の生活を続けて行くことであろう。



伊香郡志3巻

風雪に堪えし老松若みどり

備考 史実は伊香郡志による

昭和50年9月発行「新制滋賀県医師会25年のあゆみ」より転載

特別寄稿

私の病診連携

医療法人社団雨森医院 雨森正高

湖北病院創立百周年、誠におめでとうございます。何時の間にか私も85歳にもなり、気がつけば医師会で伊香病院時代の思い出をたどれるのは安井満喜子先生と愚生ぐらいになってしまいました。数多のご援助ご指導を戴いたことに感謝申し上げ、遥かな記憶を辿りつゝ駄文を書き連ねさせて頂きます。

○木造の伊香病院(~昭和37年)

昭和 34 年頃

引き違いのガラス障子を開けると、三畳ほどの板間の部屋の壁寄りに畳が二畳並べて敷かれ、その壁ぎわの布団に患者さんは寝ておられた。院長先生や看護婦さんは一々上履きを脱いで畳に座って診察や看護をしておられるのかと驚いた。

○伊香病院の新築と大樋院長の時代 (昭和37年~39年)

伊香病院の建物は、今も僻地に残る木造の校舎のような建物であった。終戦後に視察に来た進駐軍の女性 看護官が "cottage" と驚いたそうである。地域住民は、人材も設備も整った地域の中核となる病院の建設を 熱望していた。伊香郡の四町村長と町村会そして北嶋院長のご努力により、木造から鉄筋三階建ての近代設 備を持った本館が完成したのは、昭和 37 年 3 月であった。北嶋院長はその完成を見届けたうえ、後進に道 を譲り勇退されたのである。

新病院の規模は、病床数 70 床、職員は 5 科 7 名の医師を含め約 50 名であった。新館は冷房こそなかったが、 木造旧病舎にはなかった暖房設備が備わった、当時としては立派な病院であった。

○北小路院長の時代 (昭和 39 年~ 43 年)

目の離せぬ術後の患者を抱えて一人で夜の当直をしておられた北小路院長に、某有力者から往診依頼の電話がかかり、事情を説明しても仲々理解してもらえず、断るのに難儀された事例も起こり、病院組合の理事会で各町村向けに病院のかかり方を教育してもらうように依頼され、他の病院と同じように原則的に往診はされなくなったという。

○東院長の時代 (昭和43年~47年)

北小路院長がこの地の人々に惜しまれながら退職されたのは昭和 43 年であった。それに伴い、確か大学の外科の助教授であった東平介先生が院長として赴任された。学識経験ともに優れ、豪快磊落にして細かいところにも気がつく方であった。

東院長のゴルフ好きは有名で、審査会に大津へ行かれたら「瀬田のゴルフ練習場へ電話を掛けた方が早く通じる」との噂さえ耳にした。湖北医師会や伊香郡医師会のゴルフコンペでは病院の先生方と和気藹々のお付き合いが出来たよき時代であった。

○医師団総辞職により病院閉鎖

この時代の伊香病院の先生方は、伊香郡医師会の旅行にもゴルフにも参加してくださり、とても和やかな交流が行われていた。そのような中、昭和47年3月のある日、医師団総引き揚げの話を突然に聞かされた。下々の私達には全く寝耳に水で、送別の小宴を開いたとき、中井先生が「何でこれが分ってもらえんのか」と涙をこぼされたが本当の理由は分らぬままにお別れとなった。しかし先生とはそれからも親しく交流を続け、お亡くなりになった時には弔文を送った。

○伊香病院の再開 (昭和 47 年 8 月~ 56 年 3 月)

新しく赴任された馬場院長はバイタリティー溢れる指導者であった。病院の強化と充実を図るとともに伊香郡の医療レベルのアップを図るべく、院内学術集談会を診療所の医師にも開放され、学術談話会を兼ねた一泊旅行も提案された。このユニークな発想は、その後長い間、伊香郡医師会の恒例事業として取り上げられ、病院と診療所の間に嘗ってない意志の疎通と友好関係が深まり、新しい医学の勉強や診療所のレベルアップにつながった。

○公立湖北総合病院の誕生(昭和56年~)

昭和 56 年には、木之本 IC 近くの田園を買収し、最新鋭の診療検査器械を新調完備した地域の中核病院に相応しい立派な大病院を新築された。それと同時に病院の名称も伊香病院から公立湖北総合病院と改称された。20 診療科で病床数は一般 200 床、結核 10 床、伝染 10 床の計 220 床である。更に国より僻地中核病院の指定と救急指定も受け、二次病院としての機能の充実を図られた。

平成6年には馬場院長の伊香郡病院組合助役就任に伴い、後任に山下先生が院長に就任された。

平成7年には老人福祉法の改正に伴い、病院の北隣に用地を拡張し、特別養護老人ホーム「伊香の里」、ショート・ミドルステイ、デイサービスセンター、老人介護支援センター、「ケアハウス伊香」の5施設からなる「伊香郡広域総合保健医療福祉センター」が竣工された。

○伊香郡医師会解散とブロンズ像『なかよしの樹』(平成14年3月)

伊香郡医師会は明治 20 年に滋賀県医会が結成された時に、伊香支部として結成されたようである。平成 14 年 3 月 31 日には東浅井郡医師会と長浜市坂田郡医師会と合併して湖北医師会へと発展・解散することと なり、115 年の歴史の幕を閉じた。

その伝統ある伊香郡医師会の歴史と足跡をモニュメントとして遺すべく、湖北総合病院前のロータリーに 設置して頂いたのが玉野勢三先生のブロンズ像『なかよしの樹』である。

思えば医師としての大半を伊香病院から公立湖北総合病院、長浜市立湖北病院へと辿る病院の、歴代院長先生始め医局の諸先生に教えられ、研かれ、育てられ、助けられ、支えられ、或いは時には協力して頂き、実のある人生を送らせて頂きました。また職員の皆様には度々ご厄介を掛け、そして助けられて参りました。うっかりと手遅れにしてしまったと密かに案じながら紹介した患者さんまで、助けて頂く幸運にも恵まれました。また恰も自分の病院のように厚かましく気楽に訪問させて頂き、時には勝手なご無理や我儘を申し上げ、ご迷惑をおかけしました。その度ごとに温かく応対して下さったご親切は身に染みて有り難く感謝しております。自院から車で10分以内という近くにこういう病院があった幸せと創立百年という重みを感じつつ心より厚くお礼申し上げます。

名称も長浜市立湖北病院と変りましたが、エキスパートの優れた先生方が伝統ある病院を一生懸命に守って頂いていることは誠に心強く有り難いことであります。

長浜市立湖北病院の益々のご発展をお祈り申し上げ、創立者冨田八郎氏の意を肝に銘じて地域医療の充実に 寄与して頂きますようお願い申し上げます。

※この特別寄稿は、誌面の都合上短縮されたものとなっております。特別寄稿の全文をご覧にいただく場合は、下記のQRコードまたはURLにアクセスしてください。



http://www.ikbk.jp/100syunen/

特別寄稿

馬場道夫院長を偲んで

山下滋夫(元院長)

伊香病院は国鉄北陸線の木之本駅から徒歩10分と聞いていましたが、赴任の挨拶のため、車で名神を彦根インターでおり、国道8号線を北上、病院に着いたのは昭和47年8月中ごろの午後でした。玄関前の桜の木の蝉しぐれに「やっと着いた。遠いな。」と感じたのを思い出します。

4月から閉鎖中だった病院を再開すべく8月に就任された馬場院長、今村副院長にご挨拶したのが伊香病院とのご縁の始まりでした。院長が与謝の海病院の内科医長の時、小生、1次出張の新米医員で旧知でした。「気楽にやろう、しかし、診察のときは医師らしくネクタイをするように」と言われました。

当初、3人でスタートし、昭和48年4月1日から内科、外科、産婦人科、整形外科、非常勤で耳鼻咽喉科、小児科、皮膚科を標榜した病院として診療開始することとなりました。

「いつでも、どこでも、誰でも安心して最高の医療が受けられるように」をモットーに昭和49年5月、 人口腎2床開設。昭和50年12月僻地中核病院の指定を受け、自ら中河内・杉野・古保利の3無医地区診療所へ年間130回の出張診療を開始されました。

昭和58年3月1日、湖北総合病院(200床)と改称し現在地に新築移転しました。平成元年4月には 県下初のモデル的施設である老人保健施設「湖北やすらぎの里」30床を病院5階に増築併設されました。 更に高齢化、過疎化に対処するために、平成7年4月1日に特別養護老人ホーム「伊香の里」(70床)、ケ アハウス伊香(15名)、老人介護センターなどの伊香郡広域総合保健医療福祉センターを開所されました。 これにより医療・介護・福祉の継続一貫した地域包括医療・ケアが一層推進されることとなりました。これ らのことは院長の率先垂範の指導性、日常実践に基づく先見性と行動力によってのみ成し得たものでありま す。

先生は月、金の外来診療、回診、中河内・杉野・古保利出張診療、京都府立医大の講義と多忙であり、更に、伊香郡医師会、県医師会の理事、国保診療報酬審査委員・審査委員長等多数の役職を兼務され超多忙な毎日でした。病院1泊2日、2泊3日で、100 kmを21年間車で往復されたことは北陸自動車道が開通(昭和55年4月)し、温暖化で積雪が減少したとはいえ大変なご苦労でした。

先生は陽気で豪放、気さくな人柄、気配りの人で、院内外のすべての人に慕われていました。健啖家で酒は全く飲まれませんが、宴席嫌いではなく、医師会や医局の新年宴会後の恒例の麻雀を楽しんでおられました。話し好きで、病院での夜はいつも政局談議、教育論などなど話題豊富で、夏休みに家族旅行をされた時のこと等うれしそうに話されていました。

平成5年4月27日、病院再開からの永年の地域包括医療に対するご功績により藍綬褒章を受章されました。平成6年4月には伊香郡病院組合助役に就任され、その直後の健診時に異常が見つかり、周囲が愕然とするなか、先生は前向きに積極的に闘病され、最後まで我々に範を示されました。61歳の生涯を全力疾走され平成7年5月28日逝去されました。

助役に就任され大所高所からのご指導が必要なとき、ご家庭ではお子様4人が全員医師になられ、これからというときに、先生の心情を察するときいうべき言葉もありません。

昭和60年6月20日、病院創立70周年記念に、天台座主大僧正恵諦師の揮毫による「隅一于照」の石碑が病院玄関前の松の木のところに建立されました。

先生はまさに「一隅を照らす」人であり、伊香病院・湖北総合病院の中興の祖であります。 100周年にあたり謹んで先生のご偉業に感謝申し上げご冥福をお祈り申し上げます。

先陣の志を受け継いで

北村又郎(元管理者)

伊香郡と言う地名がなくなって六年近くが経つが、この度、湖北病院の創立百周年を迎え、振り返ると伊香郡と言う言葉の重厚さをしみじみ感じることが出来た。

古来、伊香郡は貢納に苦しみながらも心は裕福だったと言われている。農業、林業、漁業が自給自足の中で、それぞれの地域交易が豊かさを醸成したと言われている。かかる交易を通して地域の中に交隣と互助風土が芽生え江戸時代から頼母子講や木之本の神明講があり、それは火災や病気、不慮の災害等の助け合いの制度となっていた。頼母子講は私の子どもの頃には残っていた(昭和十年代 戦前)

明治に入り十四年には、伊香郡、西浅井郡(現伊香郡域)で相救社が結成されている。

生活困窮者救済を主たる目的に郡民より出資金を集め法人が立ち上げられている。

その後、下部組織として愛郷会が創設され、奨学制度や医療防疫活動等、今日の社会保障制度が他の地方 に先駆けて既にその頃から郡民の力で成し遂げようとされていたことは、後世の私達にとって大きな誇りで あると共に感謝を忘れてはならないと思いながら平成十六年、病院の管理者を引き継ぐこととなった。

奇しくもその年から新医師臨床研修制度が実施され、医師不足の初年度となった。過去には三十一人体制だった医局は、その年は二十六人に減少、その後順減して私の管理者として最後の年となった平成二十一年には十七人になり、その後も減少に歯止めがかからないと聞いている。かかる中で経営は極めて厳しくなり資金繰りに苦慮されている時、国は医療費抑制のため度重なる医療費の改定を行い、公立病院改革ガイドラインが示され、改革プランの策定が義務付けられ、当時の森川院長、伊達副院長を始め全職員が大変なご苦労をされているのを目のあたりにしながらも、四町の構成町から財政的支援が充分できない現実に、病院の皆さんに誠に申し訳ない気持ちになった。

しかし、そんな時にも相救社や愛郷会の先陣が私達後世にむけた、切なる思いや願いを考えながら、策定された公立病院改革プランの実施に一歩なりとも進めたい思いであった。オーダリングシステムの導入にあたっても、途中で国からの補助金中止の連絡があり、厚生労働省まで院長と共に出向いて交渉したこともあった。新病棟の建築、本館の改装についても病院議会で四町の厳しい財政事情、病院の経営内容から慎重論に圧倒されそうな時もあった。しかし、伊香郡から医療の灯は消せない、先陣の志は未来に繋がなければならない思いを自分にも言い聞かせ、皆さんにも訴えて、やがて迎える合併後も視野に入れた努力をしたが、それには院長始め病院の皆さんの絶えざる尽力があったことは忘れてはならない。

湖北病院創立百周年を期に伊香郡民の誇りを次世代に繋ぎながら、地域の拠点病院として二百周年に向かって栄える事を心より祈念いたします。

創立100周年記念によせて

安倍義明(元副院長)

私は、昭和58年(1983年)4月に滋賀医大小児科学教室から赴任しました。

病院は新築され、同年の3月に湖北総合病院として新たな出発をした時でした。それまでの伊香病院時代には滋賀医大小児科からは時々パートとして幾人かの先生が来ていた関係上、木之本町や余呉町の名前は知っていましたが、それはただ大雪で有名だったからかもしれません。

赴任せよとの話は前年の12月にいただきました。果たしてどんな町なのか、事前に偵察?したところ、病院も新しいし、町もこじんまりしていて、思ったより田舎町ではなかったので少し安心したことを覚えています。勤務が始まると、近隣の開業の先生方からの紹介患者さんや新生児も扱わなければならず、入院も10名を超えることがあって、結構忙しい毎日でした。忙しい中にも多くの楽しみもありました。

親睦会の旅行、一泊であちこち行きました。忘年会も忘れられません。劇や催し物も多くあって、忙しい中でそんなことをやる暇がよくあったなあと懐かしく思い出されます。伊香郡医師会の先生方と旅行やゴルフも楽しみました。馬場院長の学問への熱心さもあって、病院内には研究室も設けられ、幾人かの先生は博士号取得の一助となる研究も行っておられましたし、週一回大学へ行って頭脳を新鮮にする機会もありました。島田司巳前滋賀医大小児科教授、その後竹内義博現滋賀医大小児科教授による小児神経外来には県外からも通院してこられていました。現在も続けられています。診療に、研究に、娯楽にと充実した恵まれた中で勤務が出来ていましたが、最近は、医師数、看護師数の減少、出生数の減少など、漸次病院の意欲にそぐわない傾向になってきている事は残念です。その様な状況下でも、平成19年(2007年)に私が病に倒れ小児科外来が休診の危機に陥った時には、大学からの援助によって切り抜けることが出来ました。初勤務から27年後の平成22年3月、伊香郡が長浜市と合併され病院名も「長浜市立湖北病院」と改名された年に退職しましたが、現在でも週一回のパートで診療させていただいています。

最近は勤務していた当時の患者さんが父親、母親になり、その子どもさんを外来で診る事も多くなりました。子どもを連れてこられた親ごさんから「私も安倍先生に診てもらったんですよ」と言われると、当時の忙しい時期が頭に浮かびます。これまであっという間でしたが、楽しいこと、苦しいこと、悲しいことなど、今では懐かしく思い出されます。この原稿を依頼されたことをきっかけに、振り返ってみることができました。病院創立以来 100 年間の内の 4 分の 1 という長い期間に渡って「湖北総合病院」の職員として、多くの皆様と共に仕事が出来た事を感謝しています。

"徒然なる,,ままに

西垣逸郎(元内科部長)

この度、長浜市立湖北病院が創設 100 周年を迎えられ、心よりお慶びを申し上げます。

滋賀県北部の中核病院として、ほぼ一世紀にわたり優れたかつ高度な医療サービスを地域に提供してこられましたことは、実にすばらしく、称賛の念を禁じ得ません。誠におめでとうございます。

さて、私事ですが、病院には昭和58年から平成3年まで足掛け8年間、内科医として勤務させていただきました。短い期間ではありましたが、その間、本当に様々な疾病をもった、いろんなお人柄の患者さんを診させてもらい、"こんな珍しい病気もあるんや…"とか"こんなに重い病気もこういう風にすれば治るんや…"とか、医者として大いに勉強させていただきました。また、(故)馬場道夫院長はじめ良き先輩の先生方に恵まれたことも幸せでした。今、小生は京都市の近郊で小さな診療所をやっています。地域医療に貢献、とまではいきませんが、通院して来られる患者さん相手に、大将しながら毎日を楽しく過ごしています。小生を、曲りなりにも一人前の医師に育ててくれたのは病院。今でも、"私の医者としての原点はここ病院にあり"と思っています。

ところで、"縁"とは、まさに巡り合わせ。それまで、名古屋で働いていた小生が病院に来ることになったのも、何かの縁。きっかけは、旧知の馬場院長に偶然お会いしたことでした。自分から言うのも何ですが、小生はもともと全くの世渡り下手。"ゴマすり"や"ご機嫌窺い"など、とてもできまへん。これまでの職場でも、何度も御上と衝突してきました。湖北への異動前は、名古屋の病院・研究所(ガンセンター)だったんですが、ここでも上司と衝突。いかんせん、相手が大物だったため、案の定、自分が辞める羽目になってしまいました。"こんなことばっかりやっとったら、どこ行っても務まらんやろなぁ…。いっぺん、京都に帰って、一から出直すか…。"と落ち込んでいたところ、フラッと寄った大学で、偶然馬場院長にお遭いしました。"西やん、京都へ戻ってくるんか?よかったら、暫くでもうちの病院に来んか?"と声を掛けていただきました。内科の教室に入局後、何かにつけ目を掛けていただいてた先生とは、いつか一緒に働いてみたい、と思っておりましたので、快く二つ返事でお受けしました。それから8年間、先生のもとで仕事をさせてもらい、本当に多くのことを教えていただきました。

- 診察のときは、必ずネクタイをせよ。
- ・ 医者に教科書は要らない、患者さんが教科書。

30 年経った今でも、ず~っと守り続けています。今から思えば、"医師としてより、まず良き医者たれ"、 と仰ってられるんでしょう。奇しくも、先生の座右の銘は「一期一会」。縁あって、巡り会えたことに心底 感謝しています。

さて、小生が病院で働いてましたのは、アラフォーのころ。年齢的には、まさに働き盛りで、忙しいなんて苦にならず、バリバリと仕事をしてた記憶があります。外来・入院の診療や救急対応など院内での業務だけではなく、過疎地区とされた杉野や中河内等の村里へも週に $1 \sim 2$ 日出張診療に出かけてました。全国的に見ても、過疎の集落や孤島など医療サービスの行き届かないところは、まだまだ数多くあります。こうした僻地への医療対策は、今後に残された大きな課題。一端が垣間見れた気がします。出張診療といえば、思い出すのは、帰路の途中に車から眺めた路傍の"雪の壁"。高さ $3 \sim 4$ mはあろうか、というこの光景に度肝を抜かれました。この辺りもりっぱな秘境やなぁ…、と身震いしたのを憶えています。

また、病院に在籍中には、各科の先生方には公私ともども大変お世話になりました。今でも仕事上で、またプライベートでお付き合いをさしていただいてる先生方も多くいらっしゃいます。病院が小生に授けてくれたある意味"宝物"だ、と感謝しています。看護師さんはじめ、放射線技師さん、臨床検査技師さん、薬剤師の先生方等スタッフの皆さん、また大所帯だった事務職員の方々、懐かしいお顔や姿が思い浮かびます。仲良くしてた方々も多かったですが、時々は皆で長浜や彦根へ出掛け、夜遅くまでドンチャンやりましたね。ストレス発散にもなり、楽しかったなぁ…。

病院を平成3年に辞してからは、大学、府、市等に勤め、約15年前現在のところで診療所を開設しました。 医療職だけでなく、教育・研究・行政の各職を経験させてもらったので、今後は、それぞれの分野の橋渡し 的な役割を地域医療のなかで果たしていけたら…、と目論んでいます。

診療の終わった診察室で、年末の忘年会に皆で肩組み合唱したあの"琵琶湖周航の歌"を口ずさみながら、今この原稿を書いています。病院が開設されて100年。この日を最も、誰よりも喜んでおられるのは、きっと馬場院長かも知れません。草葉の陰で微笑んでおられる御姿が目に浮かびます。

末尾になりましたが、病院の今後益々のご発展と皆様方のご健勝、ご多幸を心よりお祈りいたしております。

百周年想いを今に秋の空

小嵜満智子(元総婦長)

地域包括医療の実践に長年にわたり、尽力をいただいていることに敬意を表したいと思います。

私は昭和57年5月、第10代馬場道夫院長先生のお誘いを受け、旧伊香病院に奉職させていただきました。黒田の地に全面新築移転の一年前でした。旧病院地下会議室で勤務終了後、移転準備のための毎夜の会議、私は半月前50才だった主人と永遠の決別をしたばかりでした。夜空を眺め、終バスの帰路の時、涙する毎日でした。

昭和58年3月1日、新病院の玄関での旧病院の患者様の受け入れの朝のことは、私の脳裡に今も焼きついて生涯忘れることはないでしょう。『大丈夫でしたか。新しい病院でこれからも頑張って下さいネ』 おー人お一人に手を差しのべ声かけしたことも・・・看護の原点は「他を思いやる心」。新しい病院でスタッフー同が心をひとつに温かい医療、そして真心のこもった看護を提供したいと誓った朝でした。

以降、勤務させていただいた11年間は悲喜交々の出逢いの毎日でした。院長室で何度叱咤激励を受けた ことでしょう。

あれもこれも総て、この病院で医療を受けて良かったと多くの地域の皆様に思っていただける看護の提供のためだったのでしょうか。今思えば私は随分スタッフや職員の皆様に支えられ、助けられた年月でした。

当院はへき地医療としての役割が大きな使命とされています。豪雪の日、中河内への道のりは雪の壁、まるで乗鞍スカイラインみたいと感動し口に出し笑われました。また、春先の座禅草にも出逢えたことを想い出します。多くの住民の皆様が診療に喜んでいて下さいました。

時代の流れと共に湖北にも益々の高齢化社会の波がおしよせ、平成元年4月1日には、県下初の老人保健施設「湖北やすらぎの里」が5階に誕生し、介護の現場が確立されました。この設立に看護職では宮川候子氏の絶大な尽力をいただいた賜物と今も感謝の念で一杯です。

長い様で短かった11年間で最大の悩みは人員確保でした。毎日、人員不足のことは頭から離れませんで した。

そして、私にとって決して忘れられないことは、馬場院長先生との永遠のお別れでした。大きなお声とユーモアで運営理念を熱く語って下さいました。また、その人に寄り添った医療を常に心がけておられた偉大な先生でした。

光陰矢の如し、あれから22年の歳月が流れました。唯今82才、後期高齢者となり加齢に伴う身体の衰えは致し方なく、身体の不調の時はやはり北向いてお世話になっています。

私は今、多くの人々との出逢いと別れの中で今を生かさせていただいていることに感謝の毎日です。

どうかこれからの100年に向かって地域医療の発展のために邁進して下さることを念じ、心より100 周年のお祝いを申し上げます。

創立100周年記念によせて

笹井けい子(元医療技術局長兼薬剤長)

長浜市立湖北病院100周年誠におめでとうございます。

私が旧伊香病院に勤務したのは、昭和48年8月16日からで、医師団総辞職による病院閉鎖後、京都府立医科大学より馬場道夫院長以下医師を派遣され再開の目処が立った1年後である。

まだ暑さの残る日であったが、馬場院長に挨拶に行くと「この病院をこれから大きくしていく。医療内容で他に負けない病院にするから。」と出会ってまだ2回目の私に熱く語られたのが印象的で、今なお脳裏に焼きついている。それは、院長が正に有言実行され、湖北総合病院での研修を希望する医師等が現れるまでの病院になったからだと思う。

当時は家庭的な和気あいあいとした、患者さんも気楽に受診できる病院であったが、唯一のデメリットが、 救急病院でありながら雪が降ると車が駐車場まで入ってこられないことである。特に、昭和56年の豪雪と その前後の年は除雪が降雪に追いつかず、病院までの狭い道路から救急車等車が入れなかった。薬局でも、 薬の問屋等は遠方に駐車し、歩いて重い輸液等を数回往復して病院まで運んでいたのを思い出す。

私の入局時は、薬局長含め3名の薬剤師と事務員1名の構成だったが、標榜診療科が増えるにつれて患者数も増加し、薬剤師数も増えていった。昭和58年3月に現在地の黒田に新築移転する前には5人、移転直後は7人で、最盛期は13人と助手1人であった。

まだ長期投与などという言葉もなく、処方日数 1 4 日分の期限付きだった頃は、5 月の連休前後や年末年始休暇の約 2 週間前から処方箋枚数が増え、最終週には連日 2 、3 時間の残業となった。当時の患者さんもよく我慢して待ってくださった。

湖北総合病院時代には悲しい思い出があり、それは、十代院長馬場道夫氏(当時助役)の死去である。現病院の基礎と発展を情熱を注いで創り上げられたのは明らかである。馬場院長のお別れ会が木之本スティックホールで開かれ、令夫人と子息をステージまで先導する役を命ぜられ、一歩一歩踏みしめた光景・高揚感は今でも残っている。

その頃病院を取り巻く環境が一層厳しくなり、正に激動の時代に入っていたが、スタッフの協力により無事平成5年に薬局長、平成16年医療技術局長兼薬剤長を勤められた。その間、錠剤自動分包機の導入、リスクマネジメント、安全管理、経営改善、無菌調剤加算、病棟業務、外来化学療法等、目まぐるしく変動する業界で乗り遅れることなく、むしろ先行して取り組んだ業務もあった。

平成8年に県の保健課へ片桐現医療技術局長と3回通って、10月1日に取得した薬剤管理指導施設基準届出の受理には感慨深いものがあった。また、平成20年3月1日より始まった院外処方は、平成21年3月31日定年退職までの私の37年間の最後の大仕事であった。

最後になりましたが、長浜市立湖北病院が地域の住民に愛され、益々発展されますよう心から祈念致します。

私の回想

髙橋義達(元事務長)

○はじめに

市立湖北病院が創立100周年を迎え、誠におめでとうございます。一口に100年と申しますが、この長い期間その時その時の幾多の困難を乗り越え、地域の住民の命と健康を守ってこられた先輩ならびに関係各位に、心より敬意を表するものであります。

振り返ってみますと、35年の長きにわたり勤めさせて頂けたのも、素晴らしい先輩と仲間に恵まれた賜物と感謝致しています。私の勤務させて頂きましたころのことを回想したいと思います。

○就任当時の伊香病院(昭和43年~昭和46年)

当時の病院は、現在の木之本中学校の体育館の所にあり、私は昭和43年6月に25才で庶務医事係に配属されました。7月に院長が北小路博央先生から東平介先生に交代されました。建物は、本館のみ鉄筋コンクリートで(1・2階が外来.手術室、3階が病室)、他は全部木造(2階建1棟と平屋建2棟の病棟、平屋建の給食調理1棟、医師官舎3棟、看護婦寄宿舎2階建1棟)でした。病床数は95床(一般42・結核30・伝染23)職員数は52~55名、(医師は内科3・外科3・産婦人科1・耳鼻科パート1、看護婦30・薬剤師1・レントゲン技師1・検査技師2・栄養士1・調理員5・事務員7)で、1日平均患者数は外来140人・入院70~80人ぐらいで、病室は夏の冷房などなく、冬は本館のみボイラーによる暖房がありましたが、木造の病室は湯たんぽ・電機アンカ(こたつ)でした。月初の保険請求事務は残業をして手書きでレセプトを書いていました。外来はカルテの裏面に点数整理してあるもを、入院は入院カルテより直にソロバンで点数を入れながら長い横紙を貼り付けて作っていました。外来事務当直は男子事務員が4人しかいないため技師さんにも入ってもらっていました。昭和45年秋に本館の増築が完成して119床に増床され職員数も増加しましたが、みんなが一所懸命で家族的な雰囲気がまだまありました。それでも昭和46年度まではわずかながらも黒字経営だったと記憶しています。

○病院の閉鎖と再開(昭和47年~昭和49年)

私たち一般の職員は詳しい事情は分からないままに、昭和 46 年末ごろより医局の中で、施設の改善や医療機器の充実についての要望が高まっていたようで、先生方の雰囲気がおかしくなり入院患者さんの転院が始まりついに 47 年 4 月より、産婦人科・今村久郎先生を除いて、医師の総辞職となり病院閉鎖となりました。閉鎖期間中の数カ月は職員は休みとなりましたが、管理者側(各町長)のみなさんは近隣の大学に医師の派遣依頼に奔走され、一方職員には時々に全員招集の集会があり、途中の交渉経過の説明と必ず病院を再開するのでとの慰留がなされ、集会後は各職場の清掃をしていました。この間私たち男子の事務職員は休むことなくその対応など通常の勤務をしていました。

管理者のみなさまの大変なご尽力と京都府立医科大学のご理解・ご協力により同年8月16日新院長に馬場道夫先生と副院長山下滋夫先生が着任されました。順次各科の先生が着任され科ごとに診療が少しずつ開始されました。誰一人退職する事なく全員がそろって病院の全面再開に向けて喜びにち溢れていたことを鮮明に記憶しています。そして昭和48年4月ついに全面再開となりました。今まで無かった整形外科・小児科・皮膚科が開設され、12月には4階に外科病棟を増築。翌49年3月にX線棟が完成、人工透析(2床)の治療も始まりました。病床数は123床(一般93・結核14・伝染16)となりました。また病棟の看護基準を2類から1類に変更するなどにより、職員数も医師・技師・看護婦の増加により100名を超えて来ました。

○昭和50年~昭和58年(移転新築)

昭和50年僻地中核病院の指定を受け出張診療も始まり、地域の中核病院としての機能の充実のための医療機器の整備と昭和51年11月には木造の伝染病棟をこわして病棟を増築28床増床され、病床数151床(一般125伝染12結核14)となりました。そして昭和52年6月に看護基準特1の承認を得ました。

このころより医療需要と施設規模の手狭さと将来についての問題について、昭和53年7月議会で病院の移転についての検討が始まり、昭和55年3月移転先の候補地が決定されました。昭和55年4月設計業者が決定され、各科(課)に新病院に対する要望ヒリングが始まりました。私の担当していました医事課では保険計算と請求の自動化のため、新病院では是非ともコンピューターの導入をと考え準備にかかりました。昭和57年11月新病院が竣工して、58年3月移転しました。名称も「湖北総合病院」と変わり、泌尿器科・眼科と歯科が新しく開設され、病床数も220床(一般200・伝染10・結核10)と大きくなりました。しかしながら病床数の増と外来患者数の予想以上の増加により、オープン当初は職員みんなが大変でした。私の医事課でもコンピューターの運転がうまく機能しなかったことで、はじめのうちは毎日が大変で悪戦苦闘しました。昭和58年の一日平均患者数は入院170人・外来453人でした。

○昭和59年~平成15年(退職)

新病院は馬場先生の先見の明と伊香郡4町のご支援により、患者数が順調に増加して、またその後の保険の診療報酬の点数が改正のたびにわずかづつですが上昇していたことで、平成5年まで経営は安定していて黒字でした。このころ私は昭和58年6月から平成4年4月まで会計課、その後は平成8年4月まで総務課に勤務していました。この頃の病院は特に看護婦さんの獲得に苦慮していました。

当時高齢化社会の到来で病床は慢性疾患の老人で占領されている社会的入院という状況がだんだん増加している事もあり、馬場先生の提唱により伊香郡の将来のため、平成元年4月に5階に老人保健施設「湖北やすらぎの里」を建設開設されました。その後平成5年12月に「伊香の里」を中心とする老人福祉施設を病院と一体的に機能するように病院の北側に建設、平成7年4月開所となりました。一方で病院は平成6年9月放射線・内視鏡室の拡張が完成しました。この頃私は伊香の里の開設準備室との兼務となり、建設工事と開設の人員募集等の準備、その後補助金の実績報告と国の会計監査に携わりました。

この頃、伊香郡病院組合の事業は①病院・②老人保健施設・③福祉施設・④障害児通園施設・⑤介護認定審査会・⑥訪問看護と多くの事業をしていてそれぞれに別会計で運営していました。職員数は全部で300人を超える大所帯となりました。

平成6年ごろより病院の経営はだんだんと厳しくなってきました、それは国の医療費の増大抑制のための診療報酬の切り下げが始まり、個人の一部負担金の増額改正や平成12年からの介護保険の導入による、患者数の減少もあり病院は赤字経営となりました。改善策として、病床数の変更や稼働率を高めること、看護基準上級へ3対1から2.5対1への変更等、経費関係では管理職手当のカット等の経費節減を行っていましたが、決算議会ごとに開設4ケ町より厳しく問われるようになりました。また大学医局の関係でこの地域への派遣医師の不足が始まりかけていました。

○おわりに

退職して早12年がたちました。思わぬ原稿の依頼を受け、40年前からの当時を思い出しながら、とりとめもなく懐かしく書きましたが、病院が大きく発展する非常に良い時代に勤務させていただきましたことを皆々様に心より感謝致しております。

医療の技術はどんどん進歩していくものですが、これを施すものはあくまでも人間ですので、いつの時代も特に医療や福祉は人の心が大切で心のこもった行為が望まれるのではないかなとつくづく感じる次第です。市立湖北病院の一層の発展を祈念申し上げます。

検査室の想い出

横田幸三 (元臨床検査科長)

長浜市立湖北病院設立 100 周年を迎えられ、ここに記念誌を発刊される運びとなり、誠におめでとうございます。

伊香病院の創設から湖北総合病院、そして長浜市立湖北病院と名称変更しながら 100 年が過ぎ、地域の福祉と健康を守り地域医療の基幹病院として使命を負い、高度医療を目指し今日のように立派な病院に築きあげられた関係者のご努力に対し心から敬意を表します。

振り返ってみますと、42年の永きにわたり務めさせていただけたのも、お世話になった大勢の諸先輩の方々、そして素晴らしいスタッフの皆さんにめぐまれて定年を迎えられた事に深く感謝申し上げます。 退職後早や11年が過ぎ、病院と共に歩んだ検査室の記憶を辿りながら綴らせて頂きたいと想います。

昭和37年4月に伊香郡町村組合立伊香病院に就職し医務助手として薬局勤務となりました。診療科目と 医師数は、内科3人、外科3人、小児科、耳鼻科、産婦人科各々1人で病床数は一般病棟55床、結核病棟 10床、伝染病棟10床、職員数53名と記憶しています。 薬局での仕事は、薬剤師が調剤した散薬を薬包紙 に分包する、全て手作業でした。また、毎月初めになるとレセプト書きが始まり内科・外科の診察室や薬局 の調剤台でみんな競争しソロバンの玉をはじきながら書き上げていました。そして2年後勤務異動により検 査室勤務となりました。

当時の検査室は、外来内科の前の部屋で検査技師と女性 1 名で尿検査と糞便検査、一部の生化学検査(半定量簡易法)が行われていましたが、部屋が狭いため医事課の隣の広い部屋に移動しました。この時検査室が中央検査室(中検)に変更されました。検査機器や器具といえば顕微鏡(単眼)、遠心機、恒温槽、比色計、フラン器、乾熱滅菌器、ガラス試験管、ピペットやメランジュールなどが主であり、検体処理もひとつずつ手作業でした。試験管などガラス器具は全て消毒、洗浄、乾熱滅菌器にかけて壊れるまで使用し、臨床検査用試薬は自分らが自ら作成した、いわゆる自家製の試薬でありました。現在では試験紙 1 枚で出来る検尿も、蛋白検査では尿にズルホサルチル酸を加え混濁の有無を見、ウロビリノーゲンでは試薬を数滴滴下しアルコールランプで加温し色の変化により判定、又、貧血の検査で欠かすことの出来ない血球計算などは、患者さんの耳たぶをメスで切り、メランジュールで血液と試薬を吸引して希釈混和し、ほんの一部を目盛付の計算盤に流し込み、これを顕微鏡下で目算するという方法をとっていました。検査項目も少しづつ広め、件数も多くなってきた時、先に勤めておられた検査技師が突然退職されたのが昭和 40 年 2 月の事です。

同年4月にはスタッフ1名が増員されました。当時は専門書も少なく、医学書院発行の「臨床検査法提要」を見ながら新しい検査項目を取り入れていきました。臨床検査試薬メーカーも多くなり生化学検査では、「キット試薬」が市販されるようになったのもこの時期です。キット試薬というのは、生体内物質や酵素を測定するのに必要な標準的な物質(検量線作成時の基準液)・基質液・第1次試薬・第2次試薬・発色液などが一体となってパッキングしてあり、種々の項目の測定用キットが徐々に増加していきました。検査機器も単眼顕微鏡から双眼に、炎光光度計・蛋白分画泳動装置などが導入されました。

そして、昭和47年4月、思わぬ事態が発生、医師団総辞職となったため病院閉鎖となり、つぶれるのかとみんなが不安ながら動揺し心配しましたが産婦人科のみ診療を継続され、今は亡き今村先生を先頭にして全員で病院を守りました。寂しい院内での当直、特に入院患者のいない時の深夜時の巡回は非常に辛かったのを思い出します。寂しい数日が経ち住民の一部から一日でも早く再開を願う署名運動が始まり、開設者初

め管理者のご尽力により昭和 47 年 8 月より馬場道夫先生が第 10 代院長として就任され、待ちに待った内 科他一部が再開となりました。年が明け 4 月には診療科全科が再開となり活気が出てきました。

同時期に検査技師の専門学校が京都で開校のニュースを聞き、院長先生に入学のお願いをし、京都保健衛生専門学校臨床検査学科に入学する事が出来ました。勤務しながら3年間夜間定時制学校に通いました。同じ仕事仲間の方も1年遅れて入学されました。その後臨床検査技師国家試験に合格し有資格者2名になりました。

病院再開後徐々に検査測定機器も増え、中でも血液自動分析装置 (東亜医用電子)が導入され赤血球、白血球の測定が楽になり、検査項目の種類も増加しました。検査の自動化の始まりです。昭和51年から2年の間に2名の検査技師が増員され、更に4年後に4名の増員、計8名のスタッフとなり、一般検査、血液検査、生化学検査 I・II、血清検査、細菌検査、生理検査、と専門的に検査技師が各々に担当し、検査業務に専念しました。昭和58年1月には生化学自動分析装置(日立7000型)が導入され、新しい建築工事中の新病院の検査室でオープンに向けテストランを始めました。

同年3月、病院が木之本町黒田に新築移転し、名称も新たに伊香郡病院組合立湖北総合病院が開院、診療科目は内科他20科、病床数は一般病棟200床、伝染病棟10床、結核病棟10床と湖北地区のへき地中核病院となりました。中央検査室が開院と同時に臨床検査科へと名称変更、新たに病理検査部門を開設して専任の検査技師が担当し、測定機器も全自動PH/血液ガス分析装置(チバコーニング)、全自動免疫分析装置(AXSYMダイナボット)、全自動グリコへモグロビン測定装置(京都第一化学)などが順次導入されました。

昭和50年にへき地中核病院の指定を受け、無医地区の中河内地区、金居原地区、杉野地区の各出張診療所へ医師初めスタッフと同行、毎年10月頃になると老人健診が始まり、検査技師が交代で心電図検査や検尿検査を実施し、採血した検体を病院に持ち帰り生化学検査、血液検査を実施します。院内では測定機器も順次更新し生化学部門では、自動分析装置の更新と共にバーコード対応による検体の受理、オンラインシステムの導入により測定時間の短縮、緊急検査への対応、精度の向上など画期的な改革となりました。

その後は院内のオーダーリングシステムを前提に検査科内の検査測定機器をつなぎ、受付から報告書発行までを簡素化するためのオンライン化を目指して検査技師全員で数か月にわたり検討し、稟議書決裁を頂いたものの実現出来ず、後継者にバトンを渡しました。また、精度管理も確実に実施し正確なデータを一刻も早く臨床側に提供出来るよう努力したことは言うまでもありません。

伊香病院にお世話になってから 53 年が経ち、過ぎし日の事を振り返ってみると楽しみも苦しみも今は懐かしい想い出となって甦り、寄稿の機会を与えていただいたことに深く感謝申し上げます。

医療の世界は益々進歩し予測もつきませんが、変らぬ事は「医療は患者さんの為にあり」と言えることだと思います。市民の健康を守っていただき、安心した生活が出来る長浜市立湖北病院として一層ご発展される事を心よりご祈念申し上げます。

百年の謎 - 湖北鉄道史 -

総括施設長 森川淳一郎

湖北病院が百年も前に誕生したのはなぜだろう?私は30年間その謎と向き合っている。

木之本町は古くから北国街道の宿場町で、羽柴秀吉と柴田勝家の賎ヶ岳の合戦は余りにも有名であるが、 400年以上前の歴史絵巻である。

明治には愛郷会が結成され、"地域包括ケア"の草分けとも言える活動が大正4年の病院開院に繋がるのだが、「滋賀県最北端の地でなぜ?」の疑問は残った。

昭和60年に当院に赴任した時、湖北で最も印象に残ったのが余呉町役場前の"中之郷駅"のプラットホームであった(写真)。"中之郷駅"が旧北陸線で木之本駅の北隣の駅であった事を知り、鉄道史に興味を持った。

長浜⇔敦賀港間(柳ヶ瀬 - 洞道口間は徒歩連絡)が開通したのが明治 15 年で、新橋⇔横浜間に陸蒸気が走った僅か 10 年後である。神戸⇔大津間は明治 13 年に開通したが、大津⇔長浜間は明治 22 年の東海道全線開通まで"大湖汽船"で結ばれていた。同 22 年に長浜⇔米原間も完成し、湖北は東京、神戸と直結した。道路網もない明治の創世記から鉄道で日本の中心と結ばれたことが、物資の輸送、人々の移動を通じて、湖北経済、湖北文化の発展に多大な貢献を与えたことは想像に難くない。愛郷会から病院開院へと繋がる時代背景が浮かび上がってきた。

大正2年に米原⇔直江津間の北陸線全線が開通、その2年後に当院が産声を上げることとなる。鉄道の存在は医師確保はもとより、医療物資の調達に役立った。

湖北は鉄道と共に歩んできたが、戦後の電化では東海道線と微妙な"ずれ"が生じた。東海道線の直流電化は昭和31年に完成し、湘南電車、特急電車と華々しい進化をとげた。一方、北陸線の電化は翌32年であったが、変電設備に費用がかかる理由から交流が選択された。田村⇔米原間で交直切り替えが行われ(デッドセクション)、夜間に電燈が消え、文庫本を開けたまま待ったのが今となっては懐かしい。直流化の波は次第に北上し、平成3年に長浜⇔米原間の直流化が完成し、黒壁めざして観光客が押し寄せた。平成18年には直流化が敦賀まで達し、デッドセクションは解消し"琵琶湖環状線"が完成した。木ノ本駅から白鷺城まで座ったまま3時間の電車旅である。

創世記から鉄道と共に歩んできた当院であるが、"地域包括ケア号"は住民の思いを載せて、これからも 走り続けるだろう。百年の歴史は只事ではない。



湖北での25年間

副院長 田中新司

100年の歴史を見て、当院が長らく湖北の人々に果たしてきた役割に思いを馳せることができました。近くで生まれ育ち、子供の頃から伊香病院のことは知っており、幼少時に高時出張診療所で診てもらったこと、高校生の時に馬場院長に診察を受けたことをよく覚えています。

私は昭和 61 年に京都府立医科大学第三内科学教室より当院へ2年間研修医として派遣されました。建物は新しく、ハイケア病棟があり救急患者さんも多く、各専門科の指導をして下さる先生もおられ、充実した研修ができました。同期研修医のご家族と遊んだり、琵琶湖や近くの山でバーベキューをしたり、海津の桜見や日本海へのドライブ等が楽しい思い出です。

その後、大学の血液学教室に入り4年間癌遺伝子の研究をさせていただいた後、平成4年に再度当院へ赴任しました。多くの先輩にご指導いただき、現在色々な医療機関で活躍中の同僚や後輩と一緒に臨床経験を積むことができました。この間には苦い経験もありましたが、患者さんやご家族から感謝の言葉をいただき、やりがいや喜びを感じることも多くありました。今までに出会った先生方、職員や患者さんに感謝しています。現在の当院は田舎の小さな病院ならではの良さがあります。専門科の医療だけでなく、患者さんの身体全体を診て、家族や自宅の療養環境を知り、スタッフと一緒に治療方針を考えます。職員が患者さんをよく知っ

当院へ勤務して良かった事は、四季の変化を楽しみながら琵琶湖岸を気持ちよく通勤(時には自転車、走って)できたこと、キャンプ、スポーツ、旅行など自然の中で3人の子育てができたこと、近くに歴史的名所や文化遺産、手軽に登れる里山があることです。

ているので、今後益々必要とされる在宅医療や介護でも、手続きが速く適切に対応ができます。

これからも職員がやりがいや誇りを持って楽しく仕事ができ、当院が地域住民の皆さんに親しまれ喜ばれる病院であり続けられることを願っています。

百周年の日に思う

診療局長 冨樫弘一

錦秋近き 湖北にて 百年の声を 傾聴す 勲を立てし 先人に 謝し敬しつつ 今を想う

郷を愛する 同胞の 民を憂うる 厚情に 応ふる事を 命と為し 我が院ここに 生を得る

蓋し医患の 関りは 慈愛と奉仕の 精神に 感謝と畏敬を 以てして 報いる事で 成り立てり

湖山空は 変わらねど 水木雲は 流れ移ろう 今百年の 時を経て その関りの 保たれしや

医は自らの 身を案じ 専らの門を 狭く開け 利有るか否かを 以てして 患に接して 職を求む

医を行うに 自利を以て之を為す 豈に医患の関りを古に復すべけんや 今、百周年に際し 改めて自省す 先人の初心 ゆめゆめ忘るべからず と

願わくば 今日より 新たな百年を 伊香良民と ともに歩まん



回想 ~電算システムの導入~

管理課参事(湖北やすらぎの里 事務局課長) 前田浩一

私が湖北病院に勤務し、早や35年が経ちます。当時の病院は「伊香病院」と呼ばれ、住宅が密集した町中にありました。伊香病院に勤務した経験を持つ現職者は数少なくなりましたが、私にとって印象深い出来事は、病院が昭和58年3月に現在の地に新築移転し、湖北総合病院として開院されたことです。

移転当時、私は医事課に勤務し、入院診療費の計算を担当していました。新しくなった病院には、今までにない多くの患者さんが来院され、受付窓口は混雑し、座ることなくカルテを出していたこともありました。外来の計算窓口では、診察後の診療費計算待ちの患者さんで大混雑し、1日の外来患者数が1,000人に届こうかという日もありました。外来の受付や診療計算業務が一段落した後、やっと自分の業務を行うことができました。このため帰宅は深夜になる状態が続いていました。このままでは誰かが倒れてしまう・・・・そう感じていました。

当時の診療報酬請求事務は電卓・そろばんで計算し、点数を出し、手書きで診療報酬明細書(レセプト)を作成していたので月初めは夜遅くまで残業があたり前の時代でしたが、県内の病院もまだまだ手書きで保険請求を行っていました。当院は、新病院の開所と同時に医事会計システム(オフィスコンピューター)が導入されました。しかし、全く稼動できず、コンピューターの扱いさえわからない状態でした。誰もコンピューターというモノに触れたことがなかったのです。『なんとしても夏までには稼動させる。』皆が思いを一つにし、日々の業務の外に、システム稼動のため毎日コンピューターと格闘です。業者の方数名を招き、皆で手分けし、稼動スケジュールの作成や、コンピューターの取扱いを学び、更にシステムへの患者登録、診療マスターの作成とその入力を行いました。業務終了の定時に帰れない日々や休日勤務も続き、時には帰宅することなく机上で横になり仮眠を取りました。患者基本データの登録と診療マスターの入力が完了すると、いよいよ診療報酬模擬入力です。不備が発生するたびにマスターの点検と修正の繰り返し・・・。模擬レセプトデータを滋賀県国民健康保険連合会や社会保険診療報酬支払基金に送り、許可され稼動できたのは、目標にしていた夏でした。ただ、業務の都合上、外来診療の計算は、専門業者に委託せざるを得ませんでした。

5年が経ち、システムも事故なく稼動していましたが、システムの容量不足と医事統計の充実を図るため、次期システムの導入が必要になってきました。昭和63年に2代目のシステムを稼動しましたが、この稼動には5年前のような忙しさもなく、スムーズに移行できました。その後、私は医事課を離れましたが、システムは幾度か更新され、今はオーダーリングシステムになり、電子カルテの導入も検討されています。そして情報の有効活用が必要である今日、コンピューターへの期待はますます高まり、高度な情報処理ができるようにシステムの更新に努める必要があります。

看護局

看護局長 松田多恵子

平成23年に看護局長に就任し4年目を迎えています。この記念すべき100周年を迎えることができましたのは、多くの先人の先輩方々が昼夜を問わず患者さんの看護にあたってこられた努力の賜物と感謝いたしております。伊香病院時代からの長い歴史と伝統ある病院の重みを感じているところです。このたび100周年を迎えるにあたり、看護局の現状と未来への展望について語らせていただきます。

<看護局理念>

患者様の生命と人格を尊重し「私や家族が受けたい看護」を提供します

<ミッション(組織の存在理由)>

僻地中核病院として地域住民に満足の得られる医療の提供を行います

- <ビジョン(組織が目指す将来像)>
 - ①地域の病院として良質な医療が提供できる医療機関
 - ②ケアミックス病院として外来・病棟・療養・訪問看護ステーション・老健・地域との連携と安心できるケアの提供
 - ③看護職が笑顔で働き続けられる職場環境の提供

(1) 看護局の事業

平成22年1月の市町合併後、長浜市立湖北病院と名称を改め新たな一歩を歩み始めました。平成23年3月には、未曾有の被害をもたらした東日本大震災が発生し、平成23年度は、福島県災害救護班の派遣から始まり、福島県へ出向き巡回診察を行いました。派遣された看護師はもとより全ての職員は、緊急時の避難誘導・救護・災害訓練の重要性などの必要性を痛感した年でした。

看護師不足は、厳しい状況が続いており、平成24年10月には、一般病棟に夜勤専従看護師制度を導入して夜勤時間の軽減に努めました。また、一般病棟への看護師増員のため夜間救急当直看護師を2名から1名体制にしました。その後も平成25年3月には療養病棟入院患者数を57名から40名に制限し、夜勤3名から2名体制に移行しました。

平成25年度は、当院の看護を地域へ発信し、地域の皆さんに当院を知ってもらうことを目的に、「看護宅配便」として科長による出前講座を開始しました。地域を巡回し、当院の外来・病棟・施設紹介、健康教育、看護師の日々の活動をお話しました。現在も地域住民とふれあい、顔なじみになる良い機会となり、外来へ繋ぐ一助となっています。



看護宅配便(科長出前講座)

平成26年2月からA病棟(急性期)B病棟(亜急性期)に病棟編成し、診療報酬の改正に備えました。同年10月からは、B病棟を一般病棟から地域包括ケア病棟へ移行することになりました。当院は、A病棟(7:1入院基本料)、B病棟(地域包括ケア病棟)、R病棟(医療型療養病棟)と三つの病棟運営となり、機能分化されることになりました。

また、看護師のワークライフバランスの充実としては、育児休暇明けの看護師の夜勤負担の軽減、保育時間の延長、夜勤負担の少ない部署への配置を考慮して働きやすい職場環境の改善に努めました。夜勤については、看護師自身があたり前にこなしてきた3交代夜勤が、心身や日常生活に及ぼす影響が指摘されるよう

になり、平成 26 年 11 月から夜勤交代制勤務ガイドラインをもとに変則 2 交代制勤務制度(12 時間夜勤) を導入しました。

(2) 看護教育・人材確保

平成 22 年度は、大水美名子先生をお迎えして「フィッシュ哲学」を学びました。その効果は、各所属の 随所でみられ職場を楽しく明るくしてイキイキと働く一助になりました。

平成 25 年 1 月から市立長浜病院との人事交流が始まり、1 年を期間とし年間 2 \sim 3 名の交流を続けています。

また、人材確保として県内外を問わず、富山・石川・福井・岐阜の看護大学・看護学校を訪問し看護師確保に努めました。県内においても看護学校・看護大学・近隣の高等学校へも奨学金制度と県下でも数少ない取り組みの看護師就業貸付金制度の説明に行きました。京都・大阪・鹿児島・岡山の病院合同就職説明会に

も参加し当院のPRを行い、看護師採用に繋げることができました。

平成26年度は、ハワイ・オーストラリアへの海外視察研修に2 名の看護師が参加しました。これについては次年度以降も引き続き参加しており、看護師の視野の拡大と意欲の向上に繋がっています。新人看護師については、多くのシュミレーターを使った研修会や多重課題研修など新たな取り組みを行ってきました。



海外視察研修 (ハワイ)

平成27年度は、個人の学習意欲の向上やいつでもどこでも研修が受けられるネット配信を導入し効果を 上げています。また、新人看護師は、入職時に5週間のローテーション研修を行い、病院の理解や人間関係 の構築を図り、職員全員で新人看護師を育成する教育システムを取り入れました。また、当院初の認知症看

護認定看護師が誕生し、院内外における講演や認知症看護のアドバイザーとして活躍しています。

看護師の情操教育と看護の心を伝える取り組みとして、10年前から自分の看護 史を物語として語る看護ナラティブを行い、看護の優しさを伝承しています。また、 院内外の研究発表・実践発表を積極的に行い、常に看護の視点・原点を忘れず自己 研鑽に努めています。徐々にではありますが看護師も充足してきたことから、療養 病棟や人工透析室の増床や訪問看護ステーションの充実、また、看護局全体の教育・ 研修のレベルアップを図っているところです。



新人看護師(救急蘇生研修)

(3) 看護局の未来

この数年間は激動と変革の時期であり、多くの取り組みを行いました。平成27年4月は、医師3名・看護師13名が採用となり、少しずつ当院の強みや良さを理解し共に働きたい看護師も増加してきました。これをチャンスとし、地域医療を担う病院として、住民が住み慣れた地域で安心して医療・看護が受けられる病院にしていきたいと考えています。看護師として当院看護局のミッション・ビジョンを念頭におき、患者さんに信頼される病院を目指していきたいと思います。今後ともご指導・ご支援をお願いいたします。

放射線技術科

放射線技術科技師長 文室吉辰

昭和50年当時、現在の湖北病院の前身である伊香病院では、放射線科は病院本館の北側に3階建の別棟としてあり、一階にX線撮影室・X線TV室があり2階には連続血管撮影室がありました。連続血管撮影室では、連続血管撮影装置(AOT)が稼動しており、その当時ではまだ先進的であったカテーテル法により全身の血管造影が実施されていました。診療放射線技師は数名で、休日・夜間は拘束体制で救急に対応していました。

昭和58年には伊香郡病院組合立湖北総合病院として現在の地に新築移転となり、放射線科も充実が図られました。一般撮影室2部屋・特殊撮影室1部屋・X線TV室2部屋・連続血管撮影室に加え、新たにX線CT装置(東芝TCT60A)が導入されました。今思うと、当時のCTスキャナーは1スライス9.0秒と撮影時間も長いものではあったが、当時としては画期的な装置で、今までは難しかった頭蓋内病変の評価が容易にできるようになり、救急診療に威力を発揮しました。この頃には放射線技師5名での勤務となっていました。平成7年~平成8年には更なる画像診断の強化を図るため、放射線科の拡張工事及び機器の更新が行われました。CT装置は、ヘリカルCT(Xvigor)に更新して撮影の高速化を図り、連続血管撮影装置は、腹部用Cアームと循環器用Cアームを有するDSAシステムへと更新されました。循環器専門医を常勤医師に迎え、心臓血管のインターベーションが開始されました。拡張工事では核医学施設とMRI室が増設され、ガンマカメラ(GCA-720A)及び1.5テスラMRI(VISART)が導入されました。この結果、急激に診断数が増えたため、画像診断を滋賀医科大学非常勤放射科医師に依頼することになりました。また、

平成 13 年からは時間外救急の強化のため、水・日・祝日は日直、夜間は当直の体制をとりました。

設備拡張に伴い放射線技師も2名が増員され、7名で業務を行うようになった。

平成17年には一般撮影をCRシステム、X線システムをDRシステムに更新。これにより一般撮影系がデジタル化され、平成19年に画像サーバを導入、平成21年には画像診断用モニターを配置し、フィルムでの運用からモニター診断へと段階的に環境整備を進めてきました。

平成22年1月市町合併により長浜市立湖北病院となり、これ以降は放射線技術科においても市立長浜病院とのつながりが深まり、平成24年12月に1.5テスラMRI(Magnetom Aear)を同時購入にて更新。 平成25年1月には更新時期を同じとする画像サーバ(SYNAPS)を更新・統合することになりました。 現在は、当院の画像サーバが市立長浜病院に設置され、通信回線を介して運用しています。また、両院間での人事交流も始まりました。

かつて、レントゲン写真といえはシャウカステンにフィルムを掛け診断していましたが、既にX線フイルムは姿を消し、コンピュータ技術の飛躍的な進歩により医療現場も大きく変わってきました。画像診断技術の急激な進歩につれ、診療放射線技師に求められる技術や知識は、より専門性が深まり、多様化してきています。

今後も最新の医療技術が提供できるよう日々研鑽し、また、技術のみに頼ることなく患者さん中心の医療 を常に心掛けていきたいと思っています。

創立100周年を迎え、放射線科の基礎創りに携わって頂いた先輩方に感謝するとともに、病院を創立し 育ててきて頂いた先人の地域医療への熱い思いを再度認識し、次への歩みとしたいと思います。

中央検査技術科

中央検査技術科技師長 小谷誠孝

伊香病院 - 中央検査室から始まった当科は、昭和 58 年には病院新築移転により公立湖北総合病院 - 臨床 検査科となり、平成 23 年には市町合併により長浜市立湖北病院 - 中央検査技術科と、三度の名称変更があ りました。伊香病院の頃は 2 名の人員が最大 8 名となり、現在は 6 名(正規 4 名臨職 1 名パート 1 名)となっ ております。日祝祭日および夜間の救急検査等に対しても日直や宿直(現在は夜間拘束呼び出し)で 24 時 間対応を継続しています。

私が就職したのは昭和56年4月でした。その頃の検査機器は、血液ガス分析機、半自動血球計算機、電解質測定用の炎光光度計、心電計、脳波記録計、肺活量測定機、凝固測定機、比色計、恒温槽、顕微鏡、遠心機、フラン器、乾熱滅菌器、試験管たて、ガラス試験管、ガラスピペット等で、病棟検査と外来至急検査の生化学検査に限り10項目を超える検査を試薬キットで測定し、他の外来生化学検査は外注でした。また、報告用紙は複写式でボールペンの手書きがほとんどでした。

昭和58年の病院新築移転に伴い生化学、血算は全自動分析装置となり、大幅に検体処理能力の向上がみられました。また、報告書も連続紙による印字形式となり、項目ごとの基準値や単位の統一が始まったのがこれ以降です。これに続き、免疫、薬物濃度、腫瘍マーカーの自動分析装置、細菌検査の機械化、輸血のクロスマッチ等の半自動化、検体検査のオンライン化とシステム化、生体検査のECG、脳波、ABI、エコー検査等のデジタル化、オーダーリングシステムからバーコード運用による個別管理や検体別管理、さらに電子カルテに移行しようとしています。

検査件数、項目数も格段に増えた現在、データの表示もHやL、赤や青の異常値表示に加え前回データの比較表示等の機能もあり、データ保証の精度管理等の統計処理も簡便となり、検査機器の進歩により各段にデータ把握が容易となりました。しかし、検査結果の全てを我々臨床検査技師の目で最終確認し、医師に結果を報告するということは、昔も今も変わらないことです。

現在は、医師、薬剤師、看護師、理学療法士、管理栄養士等とチームを組んでの糖尿病教室やICT活動による院内感染対策、近隣の市立長浜病院、長浜赤十字病院とも感染対策合同会議をもち活動しています。また、透析患者のバスキュラーアクセスの管理目的のエコー検査も、放射線技師・臨床工学技士との連携で軌道にのり、PTA時のエコー検査の実績もできました。これからも積極的にチーム医療に参画し、医療スタッフとしての臨床検査技師を目指していきます。

近年、医療技術局の取り組みとして「出前健康セミナー」と銘うって、公民館等で地域住民の皆様への健康啓発活動を行うようになりました。中央検査技術科は、動脈硬化等の講演を主にして血管年齢簡易測定器による実演を行っています。これに続き、予防医学の観点からもABI、頸部血管エコー、下肢静脈エコー等の精密検査につながるよう、今後も地域医療に取り組んでいきたいと考えています。

薬剤科

薬剤長 北川裕之

大正 4 年 7 月 15 日の伊香病院創設時に初代薬剤師の篠田良治先生が勤務されて以来 100 年が経過した 今日まで病院薬剤師としての想い、業務は受け継がれてきています。

伊香病院に薬局が設置された当初の頃の記録はほとんど残されておりませんが、調剤・製剤、医薬品の供給・確保を主な業務として、調剤においては現在のような多種の医薬品や調剤機器もない中で、上皿天秤での散薬秤量、薬包紙による分包等の調剤が行われていたものと窺われます。

昭和58年に「伊香郡病院組合立湖北総合病院」として新築移転された頃は、外来調剤が主業務で、安全にミスなく、患者さんの待ち時間を少しでも短縮するために、調剤の機械化・システム化が図られました。

その後、調剤を主とした薬剤師の業務も、昭和60年の第一次医療法の改正、平成4年の第2次医療法改正など医療体制が変わる中で、病院薬剤師に求められるものも内服調剤を主とした業務から、薬物治療を受けられる患者さんを主体とした薬剤の適正使用を目指した業務へと大きく変わってきました。

平 成 8 年 度 • 薬剤管理指導施設基準 取得 (薬剤管理指導業務開始)

平成17年度・外来化学療法加算施設基準 取得(プロトコル、レジメン運用開始)

平成 18年度 ・処方・注射オーダリング、レジメンオーダシステム開始

・薬剤業務支援システム導入 (調剤、薬剤管理指導、医薬品購入管理)

・薬学教育6年制の開始

平成19年度・安全キャビネットにて抗がん剤ミキシング開始

・3 月より院外処方箋発行(医薬分業:院外処方箋発行率約 90%)

・入院時の持参薬鑑別、3日分の配薬セット開始

平成 20年度 ・クリーンベンチにて高カロリー輸液無菌調製開始

平成21年度・入院定期薬の配薬カートセット開始

・市町合併(1市6町)により長浜市立湖北病院 薬剤科に名称変更

平成22年度・市立長浜病院との人事交流開始

平成23年度・東日本大震災・薬剤師として災害援助派遣(4月に5日間、5月に5日間)

平成24年度・薬学生病院実務実習受入れ

平成27年度 ·病棟薬剤業務実施加算施設基準 取得

現在、薬剤科は薬剤師6名、薬剤助手1名の体制で、「薬剤師がより主体的に薬剤に関わる業務に責任を持ち、適正な医療サービスの提供を行う」を目標とし、調剤、医薬品の管理、情報の管理、へき地医療拠点病院としての各診療所(中河内、杉野、金居原)への診療同行、休日・夜間体制の維持などが基本業務となっており、チーム医療としての病棟業務、医療安全への対応等に重点をおいて取り組んでいます。

今後も病院薬剤師として、患者様により安全で適正な薬物治療を受けていただけるように努めるとともに、 病病連携、病診連携、薬薬連携をはじめ、地域との連携を通し情報の共有を図り、病院薬剤師としての立場 からの地域医療への貢献に努めるべく、日々研鑽を続けていきたく思っております。今後とも、ご指導のほ どよろしくお願いいたします。

最後になりますが、この 100 年の歴史の中で、当院を守ってこられた先人たちの地域医療にかける想い、 努力について、この機会に振り返らせていただけたことに感謝いたします。

リハビリテーション技術科

リハビリテーション技術科技師長 熊河久登

当院のリハビリテーション科は、昭和 50 年に理学療法士(PT)1 名と助手1名で、伊香病院時代にスタートして今年で40 年になります。その後、昭和 52 年に PT が1 名増員されましたが、翌年には初代 PT が退職しました。昭和 56 年に PT が再び2 名になり、昭和 58 年には湖北総合病院として新築移転した際に、機能訓練室、物理療法室が整備され、現在に至っています。

昭和60年にはPT3名となり、昭和62年に作業療法士(OT)が採用されました。平成元年に作業療法室が増築され、作業療法の施設基準が認可されました。この後数年間、PT3名、OT1名、助手1名で、主に脳血管障害と整形外科疾患のリハビリテーションが行われていました。昭和63年から整形外科手術前後の症例について整形外科医師、病棟看護師、PT、OTが参加しての早朝カンファレンスと機能訓練室でのリハビリテーション回診が行われるようになり、20年以上にわたって継続されました。

平成4年には、PT、OTが1名ずつ増員され、PT3名、OT2名、助手1名の計6名体制となりました。この頃は、病院内のリハビリテーションだけでなく、老人保健施設「湖北やすらぎの里」、特別養護老人ホーム「伊香の里」、特別養護老人ホーム「福良荘」にもPTが出向していました。また、伊香郡4町の機能訓練事業にも参加して地域の活動や訪問指導などを行ってきました。平成22年から同26年までは、PT等による相談事業に参加し、在宅での個別訓練の指導や住宅改修などの指導を行いました。

しかし、平成23年には整形外科の常勤医師が不在となり、リハビリテーションの対象患者は大きく変化しました。入院の整形外科疾患は極端に減少しましたが、高齢者の内科と泌尿器科疾患の入院患者が多くなったことで、廃用症候群の患者比率が増加し、超高齢化を反映するような対象患者となりました。

平成 25 年に OT 1 名、平成 26 年には当院初の言語聴覚士 (ST) が 1 名採用され、当院に多い高齢の誤嚥性肺炎患者に対して、ST による摂食機能療法を開始することができるようになりました。さらに歯科医師、ST を中心に、看護師、管理栄養士、歯科衛生士、PT、OT により、摂食嚥下カンファレンスを定期的に開き、ST 介入下での VF 検査と VE 検査も行うようになりました。また、平成 26 年 10 月からは、地域包括ケア病棟が開設され、PT1 名を病棟に専従で配置しています。地域包括ケア病棟では在宅復帰に向けてのリハビリを行い、退院調整カンファレンスに参加することにより、退院後の生活に対しての助言や指導が家族だけでなく、ケアマネージャー、デイサービスやショート入所施設、居宅介護支援事業所、訪問看護ステーション等への連携がしっかりととれるようになってきています。

平成 27 年には OT1 名が採用され、当リハビリテーション科は PT3 名、OT3 名、ST1 名、助手 1 名の 8 名体制になり、スタッフが充実しつつあります。

今後、地域包括ケアシステムを進めていくにあたっては、地域や在宅でのリハビリテーションがとても重要となってきます。当科としても、今までのように入院から退院までのリハビリテーションだけではなく、退院後の生活の場面で、一人ひとりの患者さまが安全に快適に暮らしやすく、希望に沿った生活ができるためにお手伝いができるよう、より地域に根ざしたリハビリテーションを提供できるよう進めていきたいと考えています。

機器センター

臨床工学技士 山内一登与

臨床工学技士は、医師の指示のもと、生命維持装置(人工呼吸器、人工心肺関連装置、補助循環装置、血液浄化装置など)の操作及び保守点検を担当しています。

昭和63年2月に臨床工学技士法が施行され、チーム医療という環境のなかで、血液浄化領域、手術室領域、救急集中治療領域など様々な分野において、院内のいくつかの部署で業務に従事しています。

当院においては、技士法が施行されて12年後の平成11年4月に「総務課ME係」として血液透析室業務を主に、院内医療機器の操作及び保守点検業務を目的に、2名の臨床工学技士が正規採用されました。その後、平成14年4月に、「業務企画課ME係」、同16年4月に「医療技術局ME室」を経て、同22年4月から「医療技術局機器センター」へと組織替えとなりました。

今後にむけて

臨床工学技士も4名となり、血液浄化業務においては、日々の受け持ち業務に加え、透析方法(ダイアライザーや浄化法の選択など)の提案、バスキュラーアクセス管理や、急性期血液浄化療法時には拘束体制にて対応し、透析治療において必要不可欠な存在として業務を遂行しています。その他、病院での医療機器の安全性、信頼性の確保を図るため、院内医療機器の使用中・使用後の点検や年間計画に基づく保守点検を実施するとともに、機器不具合時の対処やメンテナンスを行っています。また、スタッフ研鑽の強化として、各種学会や研修会に参加して技術の向上を図り、院内スタッフへの医療機器取り扱い勉強会を開催することで、医療機器に関するリスクの軽減を図っています。

今後も院内全ての医療機器の管理を目標に、臨床工学技士が関わる事のできる業務の改革を進めていきたいと思います。



栄養科

管理栄養士 中川歩美

栄養科では、当院の病院食・湖北やすらぎの里(併設)の食事提供を行っています。

・近年の栄養科の歩み

平成 11 年 11 月: 1 週間に 1 回病棟訪問日を設け、昼食時に患者様のところへ訪床し、摂食状況を把握するようにしました。

摂食量・栄養状態に問題のある患者様の声を聞き、患者様との接点・コミュニケーションの場となるように努めています。また、その声を自分たちの仕事に反映させ、仕事の質の向上と改善を目指し、治療効果を 高めることを目的に継続して行っています。

平成18年6月20日:新厨房での食事作りが開始されました。

平成16年から厨房内の構想を立て、視察・講習会・ヒアリングと大変な時期を乗り越え、オール電化・ドライ厨房が完成しました。平成18年6月19日の夜間に引越しを行い、新環境での食事提供が始まりました。新厨房に移動してからの1年間は、栄養科の職員にとって新しい環境、新しい機器との格闘の毎日でもありました。しかし、以前の厨房と比べ空調管理も良く、快適な環境での食事提供が可能となりました。

今後にむけて

近年は、高齢化の進展による業務の複雑化等、栄養科としてその対応の難しさに苦慮しているところです。 今後益々、摂食・嚥下機能に問題のある方の増加が予想されます。摂食・嚥下障害に求められる基本的な事項と美味しく食べるということ、この両方を満たすことは非常に難しく苦慮しているところですが、出来る限りの対応を試みています。美味しいもの、好きなものを食べて笑顔になり、元気に生活を送ってもらえるような食支援をすることが栄養ケアの要であると考えています。栄養科の理念である「健康は食事から」をスタッフ全員で意識し、チーム医療の一員として、安全で安心のできる食事作りを心掛けていきたいと思います。

また、今後の電子カルテの導入・給食システムの充実により、患者様と向き合う時間を増やし、個々の患者様の栄養管理により一層努めていきたいと思っております。

湖北やすらぎの里

湖北やすらぎの里 理学療法士 川崎尚子

創立100周年にあたり、伊香病院から勤務した職員の一人として思い出を綴らせていただきます。

私が就職した昭和56年当時の病院では、一番端のスロープを上がったところに訓練室があり、その備品として平行棒が1台とマットプラットホーム(訓練用ベッド)があったように思います。訓練室は狭く、数名の患者様が車椅子で来られるといっぱいに感じられたように思います。しかし、整形外科の医師は数名おられ、骨折後の患者様のリハビリテーション指示が出ると、整形外来に置いてあるレントゲンフィルムを見に行き、医師に色々教えていただくことができたため、うれしかった思い出があります。

昭和58年には現在の場所に病院が新築移転され、訓練室は南西の日当たりが良い場所となって設備も整い、物理療法室にも牽引台やマイクロウェーブ等の機器が増えたため、充実した理学療法室となりました。

平成元年には病院の5階に滋賀県で初めて病院併設型の老人保健施設が開所され、入所定員30名のモデル施設としてスタートしました。私は、病院での業務とともに老人保健施設の専任担当となり、リハビリ体操や個別訓練、退所前の訪問を行い、利用者宅の大規模改修計画にも参加させていただきました。また、その様子をテレビ取材に来られ、NHKの番組で放送していただいたことを思い出します。

平成12年度には介護保険制度が施行され、伊香の里デイサービスセンターで要支援利用者の運動器リハビリテーションを強化するため、私は介護老人保健施設と伊香の里デイサービスセンターの兼任となり、病院を離れることになりました。デイサービスにおけるリハビリテーションでは、リハビリテーションの目的をしっかり認識しておられる利用者様は機能回復が早いのですが、リハビリテーションの実施に消極的な利用者様の機能回復は困難なため、試行錯誤する日々が多かったように思います。

平成22年には介護老人保健施設が30床から84床に増床され、同時に伊香の里デイサービスセンターが指定管理となったため、私は介護老人保健施設の専従理学療法士となりました。この頃は、開設当時と異なり早期の在宅復帰を目指すことが困難で、長期入所者が増えている状況でした。しばらくはこのような状態が続きましたが、平成26年には相談指導員が2名に増員され、入所者とともにショートステイやデイサービスの利用者が徐々に増え、先の長期入所者の問題は改善されてきました。

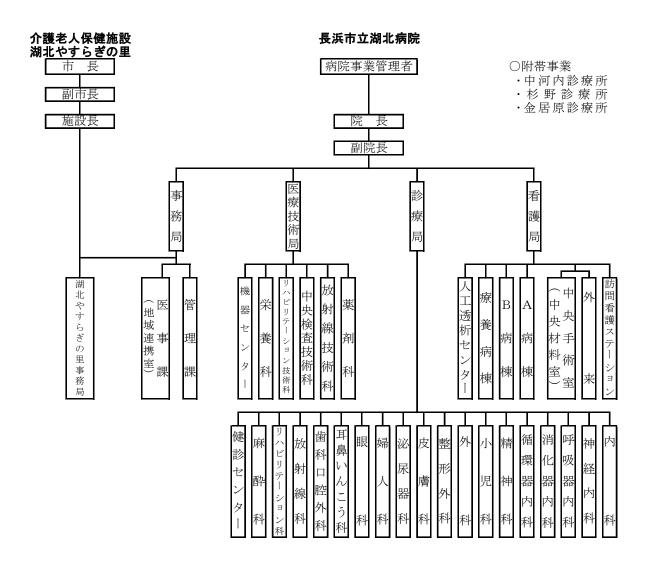
現在は、入所者の早期在宅復帰に向けリハビリテーションを強化するとともに、デイサービス利用者のリハビリテーションにも力を入れ、国が進める地域包括ケアシステムの実現に向けて取り組んでいるところです。こうしたなか、病院、特別養護老人ホーム、介護老人保健施設等の全てのインフラが、同一敷地内にあることは大きな強みとなります。今後も病院や特別養護老人ホームとの連携を密にして、新たな100年に向けてともに歩んでいきたいと考えています。

病床数の変遷

_	*= *		¥	声 床	数(床))							
3	変更年月日	総数	一般	伝染	結核	療養	包括						
1949	昭和24年 5月	25	25					1949年5月					
1952	昭和27年 3月	38	30	8				1952年3月					
1952	昭和27年 4月	66	48	18				1952年4月					
1054	昭和29年 3月	66	30	23	13			1954年3月					
1954	昭和29年 9月	60	24	23	13			1954年9月					
1955	昭和30年 3月	80	27	23	30			1955年3月					
1962	昭和37年 3月	95	42	23	30			1962年3月					
1969	昭和44年 9月	101	68	19	14			1969年9月					
1970	昭和45年11月	119	89	16	14			1970年11月					
1974	昭和49年 5月	123	93	16	14			1974年5月					
1976	昭和51年 4月	151	125	12	14			1976年4月					
1001	昭和56年 1月	147	121	12	14			1981年1月					
1981	昭和56年11月	145	119	14	12			1981年11月					
1983	昭和58年 3月	220	200	10	10			1983年3月					
1998	平成10年12月	210	200	10				1998年12月					
1000	平成11年 4月	205	205					1999年4月					
1999	平成11年 8月	200	200					1999年8月					
2000	平成12年 3月	190	155			35		2000年3月					
2006	平成18年 6月	198	141			57		2006年6月					
2009	平成21年11月	153	96			57		2009年11月					
2014	平成26年10月	153	48			57	48	2014年10月					
						,			0 50	10	150	200	250(床)

組織図

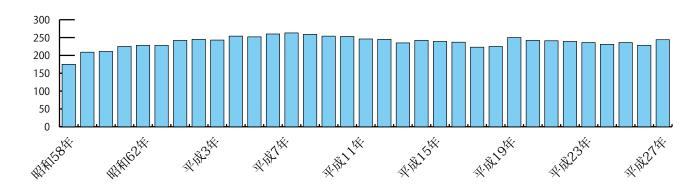
平成27年4月現在



年		度	職員数
1983	昭	和 58 年	175
1984	昭	和 59 年	209
1985	昭	和 60 年	211
1986	昭	和 61 年	225
1987	昭	和 62 年	228
1988	昭	和 63 年	228
1989	平	成 元年	242
1990	平	成 2年	245
1991	平	成 3年	243
1992	平	成 4年	254
1993	平	成 5年	252

年		莊			晔 吕 粉
平		度			職員数
1994	平	成	6	年	260
1995	平	成	7	年	263
1996	平	成	8	年	259
1997	平	成	9	年	254
1998	平	成	10	年	253
1999	平	成	11	年	246
2000	平	成	12	年	245
2001	平	成	13	年	235
2002	平	成	14	年	242
2003	平	成	15	年	239
2004	平	成	16	年	237

		(単位:人)
年	度	職員数
2005	平 成 17 年	223
2006	平 成 18 年	225
2007	平 成 19 年	250
2008	平 成 20 年	242
2009	平 成 21 年	241
2010	平 成 22 年	239
2011	平 成 23 年	236
2012	平 成 24 年	231
2013	平 成 25 年	236
2014	平 成 26 年	228
2015	平 成 27 年	244



内視鏡検査件数と手術件数

年 度	内視鏡検査件数	手術件数
1983	922	677
1984	1,641	827
1985	1,651	781
1986	2,002	821
1987	2,269	853
1988	2,463	841
1989	2,191	839
1990	2,560	864
1991	2,254	874
1992	2,346	919

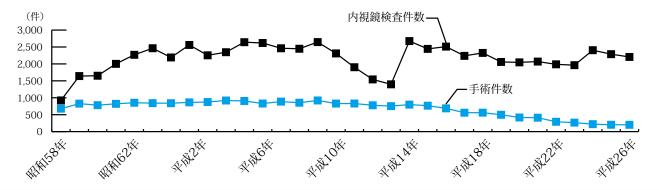
2,642

905

1993

年 度	内視鏡検査件数	手術件数
1994	2,618	830
1995	2,462	886
1996	2,448	854
1997	2,645	920
1998	2,310	829
1999	1,902	830
2000	1,542	778
2001	1,397	753
2002	2,675	798
2003	2,444	766
2004	2,511	687

		(単位:件)
年 度	内視鏡検査件数	手術件数
2005	2,238	559
2006	2,325	560
2007	2,058	498
2008	2,046	417
2009	2,069	411
2010	1,988	291
2011	1,963	266
2012	2,405	220
2013	2,288	203
2014	2,206	201

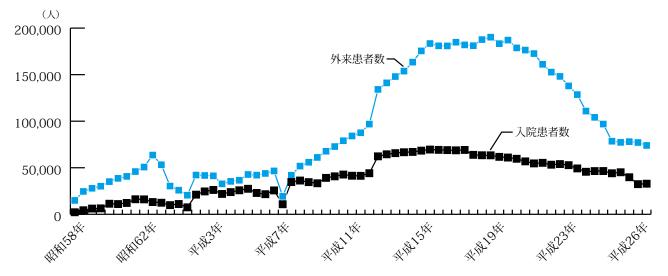


入院·外来延患者数

	(単位:人)

年	:	度	入院患者数	外来患者数
1948	昭	和 23 年	2,184	14,889
1949	昭	和 24 年	4,353	24,536
1950	昭	和 25 年	6,130	27,969
1951	昭	和 26 年	6,367	30,168
1952	昭	和 27 年	11,335	35,100
1953	昭	和 28 年	10,992	38,593
1954	昭	和 29 年	12,179	40,705
1955	昭	和 30 年	16,149	45,917
1956	昭	和 31 年	16,034	50,790
1957	昭	和 32 年	13,169	63,603
1958	昭	和 33 年	12,408	53,237
1959	昭	和 34 年	9,845	30,333
1960	昭	和 35 年	11,057	25,885
1961	昭	和 36 年	7,481	20,495
1962	昭	和 37 年	21,105	42,149
1963	昭	和 38 年	24,562	41,704
1964	昭	和 39 年	26,124	41,304
1965	昭	和 40 年	21,867	32,750
1966	昭	和 41 年	23,822	35,377
1967	昭	和 42 年	25,778	36,557
1968	昭	和 43 年	27,396	42,749
1969	昭	和 44 年	22,892	42,057
1970	昭	和 45 年	21,597	43,873
1971	昭	和 46 年	25,655	46,516
1972	昭	和 47 年	10,792	19,280
1973	昭	和 48 年	34,652	41,954
1974	昭	和 49 年	36,267	51,768
1975	昭	和 50 年	34,549	55,907
1976	昭	和 51 年	33,319	61,069
1977	昭	和 52 年	39,126	67,734
1978	昭	和 53 年	40,769	72,754
1979	昭	和 54 年	42,710	79,007
1980	昭	和 55 年	41,423	84,104
1981	昭	和 56 年	41,321	87,576

年	:	度	入院患者数	<u>(単位・八)</u> 外来患者数
	- 昭		1	
1982	昭	和 57 年 和 58 年	44,128	96,881
1983			62,256	134,133
1984	昭四	和 59 年	64,441	141,166
1985	昭	和 60 年	65,681	147,945
1986	昭	和 61 年	66,651	153,796
1987	昭	和 62 年	66,978	163,440
1988	昭	和 63 年	68,375	175,480
1989	平	成元年	69,540	183,434
1990	平	成 2 年	69,201	180,939
1991	平	成 3年	68,940	180,857
1992	平	成 4年	68,713	184,852
1993	平	成 5年	69,111	181,940
1994	平	成 6年	63,856	181,074
1995	平	成 7年	63,417	187,667
1996	平	成 8年	63,344	190,230
1997	平	成 9年	61,698	183,297
1998	平	成 10 年	60,970	187,089
1999	平	成 11 年	59,631	178,721
2000	平	成 12 年	56,838	176,396
2001	平	成 13 年	54,663	172,627
2002	平	成 14 年	55,274	161,088
2003	平	成 15 年	53,256	152,713
2004	平	成 16 年	53,950	148,116
2005	平	成 17 年	52,775	137,882
2006	平	成 18 年	49,271	128,581
2007	平	成 19 年	45,672	110,873
2008	平	成 20 年	46,417	104,151
2009	平	成 21 年	46,468	96,917
2010	平	成 22 年	44,057	78,487
2011	平	成 23 年	45,144	77,268
2012	平	成 24 年	39,804	78,040
2013	平	成 25 年	32,372	77,110
2014	平	成 26 年	32,862	73,950

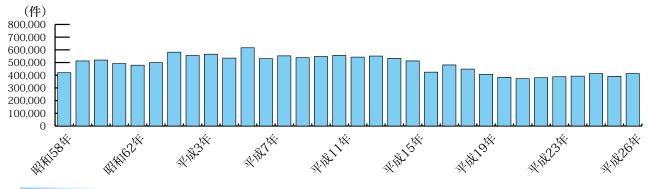


臨床検査件数

年	度	検査件数
1983	昭和58年	419,810
1984	昭和59年	512,332
1985	昭和60年	519,562
1986	昭和61年	491,724
1987	昭和62年	479,074
1988	昭和63年	498,738
1989	平成元年	581,577
1990	平成 2年	555,278
1991	平成 3年	565,474
1992	平成 4年	535,016
1993	平成 5年	616,369

度	検査件数
平成 6年	530,565
平成 7年	552,589
平成 8年	538,449
平成 9年	547,435
平成10年	555,723
平成11年	542,762
平成12年	551,124
平成13年	532,045
平成14年	512,503
平成15年	424,248
平成16年	480,833
	平成6年 平成7年 平成8年 平成10年 平成11年 平成12年 平成13年 平成14年 平成15年

		(単位:件)
年	度	検査件数
2005	平成17年	448,433
2006	平成18年	407,453
2007	平成19年	383,381
2008	平成20年	372,640
2009	平成21年	380,370
2010	平成22年	387,978
2011	平成23年	392,859
2012	平成24年	413,108
2013	平成25年	391,406
2014	平成 26年	413,108

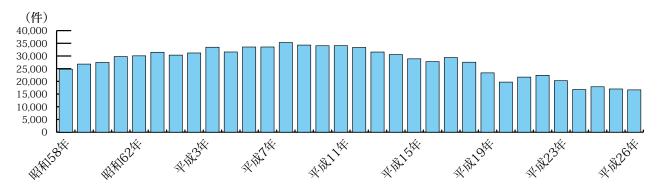


放射線検査件数

年	度	検査件数
1983	昭和58年	24,792
1984	昭和59年	26,813
1985	昭和60年	27,450
1986	昭和61年	29,766
1987	昭和62年	30,068
1988	昭和63年	31,465
1989	平成元年	30,344
1990	平成 2年	31,190
1991	平成 3年	33,452
1992	平成 4年	31,578
1993	平成 5年	33,540

年	度	検査件数
1994	平成 6年	33,548
1995	平成 7年	35,299
1996	平成 8年	34,299
1997	平成 9年	34,044
1998	平成10年	34,078
1999	平成11年	33,358
2000	平成12年	31,556
2001	平成13年	30,561
2002	平成14年	28,885
2003	平成15年	27,776
2004	平成16年	29,375

		(単位:件)
年	度	検査件数
2005	平成17年	27,546
2006	平成18年	23,355
2007	平成19年	19,715
2008	平成20年	21,684
2009	平成21年	22,383
2010	平成22年	20,268
2011	平成23年	16,779
2012	平成24年	17,882
2013	平成25年	17,011
2014	平成 26年	16,655



リハビリ件数

平 成

平 成

平 成

平 成

平 成

1989

1990

1991

1992

1993

年	度	件 数
1983	昭和58年	22,761
1984	昭和59年	21,736
1985	昭和60年	21,014
1986	昭和61年	16,486
1987	昭和62年	15,419
1988	昭和63年	17.693

元年

2 年

3年

4年

5年

21,057

21,561

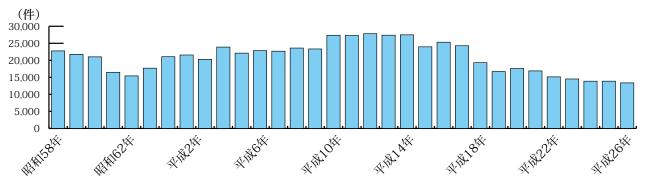
20,267

23,883

22,110

年	度	件 数
1994	平成 6年	22,850
1995	平成 7年	22,677
1996	平成 8年	23,602
1997	平成 9年	23,336
1998	平成10年	27,359
1999	平成11年	27,283
2000	平成12年	27,811
2001	平成13年	27,377
2002	平成14年	27,483
2003	平成15年	23,962
2004	平 成 16 年	25,318

		(単位:件)
年	度	件 数
2005	平成17年	24,276
2006	平成18年	19,302
2007	平成19年	16,701
2008	平成20年	17,597
2009	平成21年	16,886
2010	平成22年	15,131
2011	平成23年	14,523
2012	平成24年	13,871
2013	平成25年	13,876
2014	平成 26年	13,367

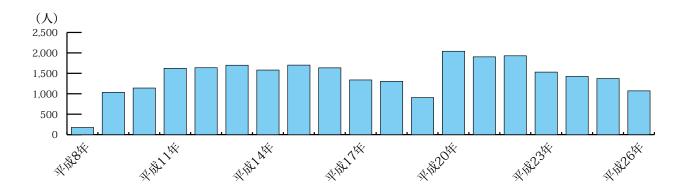


薬剤管理指導人数

平成19年6月C病棟閉鎖 平成20年3月から院外処方開始 平成26年10月からB病棟を 地域包括ケア病棟に再編

年	度	人 数
1996	平成 8年	174
1997	平成 9年	1,034
1998	平成10年	1,140
1999	平成11年	1,622
2000	平成12年	1,637
2001	平成13年	1,698
2002	平成14年	1,580
2003	平成15年	1,701
2004	平 成 16 年	1,634

		(単位:人)
年	度	人 数
2005	平成17年	1,338
2006	平成18年	1,305
2007	平成19年	906
2008	平成20年	2,040
2009	平成21年	1,903
2010	平成22年	1,929
2011	平成23年	1,530
2012	平成24年	1,424
2013	平成25年	1,373
2014	平成 26年	1,071



診療局



^{院長} 伊達 成基

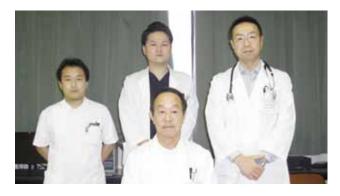


^{副院長} 田中 新司



診療局長 **冨樫** 弘一







事務局



事務局長 西川 昇



管理課



地域連携室



医事課



施設係



保育

看護局



看護局長 松田 多恵子



看護局理事 小森 恵美子



A病棟



B病棟



療養病棟



外来·手術室



看護局長室



人工透析センター



訪問看護ステーション

医療技術局



医療技術局長 片桐 弘美



薬剤科



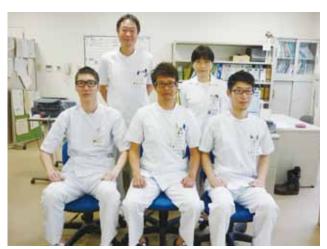


中央検査技術科









機器センター



リハビリテーション技術科



歯科衛生士



栄養科

やすらぎの里



事務局



スタッフ

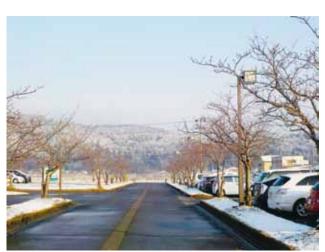
病院周辺の景色



駐車場脇の桜



庭園に咲くアジサイ



病院北側の冬景色





庭園の雪景色

編集後記

記念誌部会長 片桐 弘美

当院は、平成 27 年 7 月に創立 100 周年を迎えるにあたり創立 100 周年記念事業(記念式典、記念誌発行)を行うことになりました。

委員会が平成 26 年 9 月に発足し、式典部会と記念誌部会の 2 部門に担当を分けて記念事業の企画・運営にあたりました。

式典部会は、式典会場・特別講演・顕彰者・招待者・記念品など様々な事について幾度 も打合せを行い、記念式典は平成 27 年 10 月 14 日に挙行されました。

記念誌部会の委員は11名で、同年4月から活動を開始しました。戦中戦後の混乱や病院 閉鎖、増築や移転などで資料は散逸し、昭和60年7月に創立70周年記念式典が当院を会 場として挙行された際に発行された小冊子が残っていましたが、その他に記念誌は発行さ れておらず、また、日常の業務を行いながら100年の歴史に向き合い、記念誌編集の作業 を進めるということが、どれほどの苦労を伴うものか、活動開始当初は知る由もありませ んでした。しかしながら、編集にかかわったことで多くの事を知ることが出来ました。

ここにようやく発刊に至り、記念誌部会委員一同安堵しています。

病院創設初期や日本医療団への移管に関する資料などを提供して下さった冨田八郎院主のご令孫光彦氏、貴重なアルバムをお貸し下さった近藤章一事務長のご子息齊伸氏、その他、昔の記憶をたどって協力していただいた元職員の方々、原稿の依頼を快諾してくださった方々、協力いただいた職員一同、関係各位に深く感謝申し上げます。

平成 28 年 3 月

創立 100 周年記念事業記念誌部会委員(五十音順)

 伊藤 公一
 小谷 誠孝
 片桐 弘美

 桐畑 明美
 小森 恵美子
 田中 新司

 冨樫 弘一
 中川 浩孝
 前田 浩一

前田 優子 山根 利男

長浜市立湖北病院創立100周年記念誌 平成28年3月発行

編集·発行 長浜市立湖北病院 滋賀県長浜市木之本町黒田 1221 番地

TEL: 0749-82-3315 FAX: 0749-82-4877

URL: http://www.ikbk.jp/

印刷 有限会社おぎした印刷